

# 電気醬説『K I N G～キン グ～』

りいだあ (by電気醬油)

## 盗賊

---

王様は困っていました。

最近、『蟻』という盗賊に何度も盗みに入られていたのです。

王様のお城は最高級のフランス産上白糖でできています。近頃は「地産地消」だの「環境に優しい建築を」などとマスコミが騒ぎ立てるので、沖縄産の黒砂糖が流行っているようですが、王様はこの上白糖が大変気に入っていました。

なんといっても、この白さは他の建材にはない上品さがあります。

しかもこの上白糖は、王様が直々に任命した職人がフランスに赴き、ビート糖(甜菜糖)主体の現地においてわざわざサトウキビ栽培から一貫して製造を担っている超特別品なのです。

建築マニアの間でも話題で、ネット上ではいくら金を出してもいいからなんとか手に入らないかと、よからぬ取引まで行われているようです。

お城に出入りしている情報屋の話では、蟻一味は盗んだ上白糖をこともあろうに食用として高く売ろうと目論んでいるらしいのです。

「こんなときに皇子様がいらっしゃれば...。」

蟻対策の会議中、側近のひとりがボソリと呟きました。小さい声で言ったつもりだったのですが、王様の耳に入ってしまった。

「あいつのことは言うな。私にたてついて城を出た者だ。」

王様は少しムツとしています。

「あんなに仲がおよろしかったのに、どうしてこんなことに...。」

どなたもずっと気になっていたのでしょう、他の側近が今度は王様に直接お尋ねしました。

「あの家庭教師めにそそのかされたのだ！バカ息子が！」

王様は、皇子の件にはあまり触れたくなかったのですが、つい腹立ちまぎれに言ってしまいました。

「家庭教師？あの環境学部の女子大生ですか？」

また別の側近は、発言してすぐに「しまった！」と思いましたが、もう手遅れでした。

王様の顔はみるみる真っ赤になっていきます。

「あの家庭教師を付けてからだ。上白糖は体にも環境にもよくないなどと言い出したのは！」

王様はまた怒りが込み上げてきて、拳を震わせました。

もう側近達も、何も言えませんでした。

とある雑居ビルが建ち並ぶダウンタウン。

不景気の煽りで、ほとんどが空室状態。不動産屋さんも商売あがったりです。

そんな中、あるビルの一室にはたくさんの人達が忙しそうにしています。

ここは地下室なので、かなり格安の賃貸料で借りられたのだと、先日匿名で取材を受けてくれた方は言っていました。今日はその方の姿が見えません。やはり金で動く口の軽い奴は信用でき

ないということでしょうか？

それはいいとして、なぜかこちらの皆さん、黒いタートルネックで統一されています。制服のようです。

奥には特別室が設けられていて、若い男が思い詰めた表情で、暗がりの中ベッドサイドに座っています。

「計画は着々と進んでいます。」

いつからその部屋にいたのか、女がスッと近づいてくると耳元で囁いた。

「この様なやり方で、父は改心してくれるだろうか？先生。」

先生と呼ばれたさっきの女は、男の肩にそっと手をかけると優しい声で応えました。

「ご心配はいりません。私達にお任せください。」

男は、その言葉と優しい微笑みに安堵の表情を浮かべましたが、目の奥の鋭い輝きには気づかなかったようです。

蟻一味の首領は若い女だという情報が入ってきました。

「女ごときにやられっぱなしとは、警備部長は何をやっとるんだ！今度捕獲に失敗したら首をはねてやる！」

王様は大変ご立腹です。

「お父様、その発言は聞き捨てなりませんわ！」

横で聞いていた皇女が目を吊り上げて言いました。

皇女は母親の王妃によく似ていて、国民的美少女と言われています。家臣の中にもファンが多く、今回も「怒った顔もキレイだな～」と内心喜んでいる者までいました。

「なんだと！お前は警備部長の肩を持つの...」

「女ごときとは何ですか！」

王様の言葉を遮って皇女の声が響きました。

「そ、、、そこお？」

側近達もポカンと皇女に見とれていた家臣達もびっくりです。

「こんなときに何を言ってるんだ！相手は盗賊だぞ！フェミニズムを気取るのもいい加減にしろ！」

「いいえ、お父様！今日という今日は言わせていただきます！お父様の女性蔑視発言は国民の間でも問題になってますわ！」

皇女は一步も引こうとしません。

「お前までも私にたてつくのか！」

王様は顔を真っ赤にして怒っています。

「お兄様に先を越されたけど、私もいい人見つけてお城を出てやる！」

皇女はそう言い捨てると自分の部屋へこもってしまいました。

「どいつもこいつも私を怒らせおって。」

「皇女は思春期ですから。」

王妃が庇って言いました。

「お前はどんな育て方をしたんだ！ああ、泣くな！泣くな！涙で床の砂糖が溶けてしまうではないか！」

## 甘い誘惑

---

ある暑い夜のこと。

「こんな日は、炭酸水に砂糖をた〜っぷり入れて、ちょっとレモンを搾って...グビッと、あ〜ウマイ！」

王様は、自室に常備してある1m四方の角砂糖を削ってレモネードを楽しんでいました。

「こりゃたまらん！もう一杯だな。」

王様が4杯目にとりかかろうとしていると、バ〜ンと大きな音がして扉が勢いよく開きました。

「おおおお王様、たたたた大変ですうう！蟻から...蟻から...蟻...ごほっがほっ...のの予告...状がとどつとどつ届きましたあああ〜！」

大慌てで入ってきたのは、蟻対策担当の側近でした。勢いで王様の前までスライディングしてしまいましたが、ムクリと起き上がると、落ち着いた顔になって報告を続けました。

「今度は、王様が大切にされている氷砂糖の彫刻『甘い誘惑』を盗むと書いてあります。」

王様は音に驚いてレモネードをこぼしてしまったのでアタフタしていましたが、その報告を聞いて顔つきが変わりました。

「なにに！しばらくおとなしくしていたと思ったが、とうとう来たか！」

王様は苛立ちを押さえきれず、ガリガリと角砂糖を削り出しました。

そこへ「うおっほん」と、ひとつ咳払いをして大男が入ってきました。

「王様ご安心ください。このアレキサンドロス金剛にお任せくだされば、蟻など取るに足りません。」

新しい警備部長です。

「うむ、頼もしい。私が直々に任命したのだからな。前の警備部長のような失態は許さんぞ。」

「もちろんです。あんなちょび髭と一緒にされては困りますな。」

アレキサンドロス金剛は、なぜか上着を勢いよく脱ぐとマッスルポーズをとり始めました。

「前の警備部長はちょび髭だったのか？よく見ていなかった。」

王様もつられて上着を脱いだのですが、みっともなく突き出たお腹をさらしただけでした。

「はい、ちょび髭の上に実はカツラでして、一本だけ残った髪の毛をそれはそれは大事にしていました。」

警備部長は新たなポーズに移りました。

「なんと、そんなミミッチイ者が警備部長をやっていたのか！蟻になど敵うわけがない！処刑して正解だったわい。」

王様もなんとなくポーズをとり続けました。

「そういえば先日、居酒屋でたまたま一緒になりましたが、首と体を切り離されたのでいろいろ不都合があって困ると言っておりました。あっ、もちろん話したのは首の方でございます。」

「ふははははっ。お前もそうならぬように、頑張って職務を果たせよ。」

勢いで下まで脱ごうとしだした王様を、側近が慌てて止めに入ったのでした。

さてとうとう予告の日になりました。

警備部長のアレキサンドロス金剛が王の間へやってきました。

「王様、警備は万全です。この日のために鍛え上げた植木兵にお任せください。」

「植木兵とな？聞いたことないぞ。」

王様は聞き返しました。

「はい、お城も人手不足なので、庭掃除をしている植木達を使うことにしました。」

王様は少し考えていましたが、何か思い出したようです。

「ああ、5年前の秋に、自分で落とした落葉は自分で拾うように命じてから、なんとなく庭掃除係になってしまったのだったな。」

かなり前のことなので、すっかり忘れていたようです。

「あの者達なら庭のことは隅々まで知っていますので、蟻一味はお城までたどり着くことはできません。」

警備部長は自信満々です。

「さすがはアレキサンドロス！しっかり警備しろよ。」

頼もしい警備部長に王様もご満悦です。

「お任せください！あと、恐れ入りますが私の名前はアレキサンドロス金剛でございます。」

「わかっておる。アレキサンドロス頼んだぞ。」

「はい、アレキサンドロス金剛でございます。」

警備部長はそう言い残すと、少し怒ったように退室して行きました。

荒い足音が聞こえなくなると、王様は控えていた側近に訊ねました。

「あいつはなぜあれほどフルネームにこだわるのだ？」

「はあ、実は前の警備部長はアレキサンドロス里璃流(さとる)と申しまして、歳の離れた彼の実兄でございます。それはそれは仲の悪い兄弟で有名でして。たぶんその兄と混同されるのが嫌なのでしょう。」

「ふ～ん、そうか。気を付けるとしよう。」

夜が明けました。

本日は快晴、気持ちのよい朝の訪れです。

早朝に正門の辺りで少しゴタゴタがありましたが、蟻とは関係ないようで、結局大きな騒ぎも起きませんでした。

「ふっ、蟻め。私に恐れをなして諦めたとみえる。」

警備部長は、氷砂糖の彫刻『甘い誘惑』が安置されている部屋の鍵を開け、中へ入りました。

彫刻は部屋の中央に鎮座し、朝日を反射していつもより白っぽく見えるようです。

警備部長が勝ち誇った笑みで近づいていくと。

「ん？何だこの粉は？」

床に白い物が見えました。お城の建材はほぼ砂糖でしたが、この部屋はセキュリティのためもあって黒い大理石でできていました。警備部長は膝をついて粉を指に付けると、匂いをかいでみましたがわからない。少し考えて舐めてみました。

「こ...これは!？」

顔を上げると彫刻の元へ駆け寄って行きました。

みるみる警備部長の顔が青ざめていくのが、誰の目にもわかりました。

『しょっぱくてごめんなさい』

タイトルボードが書き替えられていました。

「こ...これは、塩のカタマリ...。」

警備部長は全身をプルプルと震わせたまま立ち尽くしてしまいました。

「朝日で白っぽく見えていると思ったが、考えてみればこの部屋に窓など無いではないか...。ふっふふふ...。」

「アレキサンドロス様、お気を確かに。」

部下のひとりが近づいていった、その瞬間。

ド〜ン！！！！

塩の塊『しょっぱくてごめんなさい』は粉々に粉砕されてしまいました。

飛び散った塩の破片はキラキラと輝きながら警備部長に降り注いでいきます。

「私の名はアレキサンドロス金剛だ〜！」

その手にはアレキサンドロス家の家宝“EX狩場”が握られていました。

「許さん。許さんぞ蟻どもめ〜！」

## 家具屋さん

---

王様は警備部長の報告を、珍しく静かに聞いていました。

「ところが、その塩の塊には爆弾が仕掛けられていまして、跡形も残っておりません。私も危ういところでした。」

後ろで部下がコソコソと何か囁きあっているのをキッと睨んで、警備部長は報告を終えました。

「そうか、それは災難だったな。もう下がってよいぞ。それからお前は処刑だ。」

王様は宙を見たまま、右手で首を切るしぐさをしました。

「お、お、お、お待ちください！今回のことで気づいたことがあります。今はまだご報告できませんが、秘密裏に新たな策を練っております。いま一度、いま一度だけ私にチャンスを！」

「アレキサンドロス金剛様、先ほど王様にお話されておられた秘策とは？私はまだ伺っておりませんが。」

王の間を出るとすぐに、参謀長官の伊達が訊ねました。

「策などこれから考えるのだ。一度の失敗くらいで首を切られてたまるか！」

警備部長は、顔をしかめて吐き捨てるように言いました。

翌日、早朝から警備会議が開かれました。王様もこれまで以上に真剣な面持ちで、今までの警備計画の不備を徹底的に洗い出すと鼻息を荒くしています。

会議の冒頭挨拶として、王様が上白糖への想い、蟻への憎しみを涙ながらに語っていると、一番後ろの扉が静かに開きました。門番がチラチラと部屋の中を覗いています。あまりに場が緊迫しているので、入れないでいるようです。

しばらくすると警備部長が気づきました。

「何をしている！会議中だぞ！」

「も、申し訳ありません！源助と名乗る老人が、王様に会わせろと言ってきまして...。」

門番は困ったように報告しました。

「なんだそんなことか。大事な会議中だぞ！とっとと追い返せ！」

「は、はい!!」

門番は走って戻っていきました。

「どうしたのだ？」

会議テーブルに戻ってきた警備部長に、隣の側近が訊きました。

「いや、大したことではございません。源助と名乗る酔ったじじいが、王様に会わせろなどと戯れ言を言っているそうで...」

「なに～！源助様だと！」

側近は飛び上がらんばかりに驚きました。

「まさか追い返したりはしてないだろうな？」

「はい、追返すように言いつけたところですが...なにか？」

警備部長は何がなんだか分からない様子。

「すぐに追いかけて、丁重にお迎えしろ！」

「はっ？」

「いいから早くしたまえ！」

警備部長は追いたてられるように正門に向かいました。

「どうした騒々しい！大事な会議中だぞ！警備部長はどうした？」

騒ぎに気づいた王様が怒鳴りつけました。

先ほどの側近が、王様に近づいて耳打ちすると、王様の顔色がみるみる変わっていきました。

「すぐに応接間にお通ししろ！会議は中止だ！あのバカ警備部長はやはり処刑だ！」

王様は扉に向かいながらそれだけ皆に言い残すと、会議室を走り出て行きました。

「どうしたんです源さ～ん！突然いらっしゃるなんて～。一本お電話いただければ、迎えを出しましたのに。」

応接間の扉を勢いよく開けながら、王様は大声で言いました。

先程までとは打って変わって、顔は満面の愛想笑いです。

「隣の家から来るのに、なんで迎えが必要なんでい。」

源さんと呼ばれたその痩せた老人は、キセルをふかせながらソファーにあぐらをかいて座っていました。

「毎日、ついでだと思って門の前まで掃いてやってんのに、あの門番ときたら俺の顔も覚えちゃいねえ。いったいどんな教育してんだか。」

王様の前だというのに、まったく臆するところもありません。

「すみません。あの～、新入りなものでして。」

王様もシドロモドロで、敬語など使っています。

警備部長も応接間の扉の前で控えていましたが、隣の側近に小さな声で話しかけました。

「あの源さんという老人は何者ですか？」

「源さんなどと気安く呼ぶな。あの方は有栖山源之助様だ。先代の王様の幼馴染みで旧華族なのだが、お高くとまった家風が気に入らず、お家を飛び出して修行された家具職人だ。今では源助と名乗っておられる。お城の左隣に四角の中に「げ」と書いた暖簾の升源家具屋さんがあるだろう。あそこのご主人だ。全国に弟子を持つ凄腕の職人だよ。お城の家具はすべて升源さんで揃えているんだぞ。焼き印が付いてるの気づかなかった？」

警備部長は、ちょうど目の前にあった花瓶の台を確認し、升源の焼き印を発見しました。

「なんと！まったく存じ上げませんでした。」

彼も升源家具屋は知っていましたが、いつもは格安のホームセンターに行っているのに、そんなに凄い店とは知らず、店主を見たのも初めてでした。

「王様が幼い頃からよく面倒をみて頂いていたそうで、王様がこの世で唯一頭の上がない

方だ。」

その側近もお城に就職した際、当時の側近室長から聞いたのだそうです。

警備部長がびっくりした顔で応接間の方を見ていると、「ああ、それとね。君は処刑だって。」

その側近がさらっと言い放つと同時に、処刑役人が現れ警備部長の両脇を取りました。

「え~~~~っ！」

警備部長はズルズルと引きずられながら、暗い通路の奥へと消えて行ってしまいました。

応接間では、ソファでキセルをふかしている源助の前に王様が正座でかしくまっています。

「それで...、源さん。今日は...。」

沈黙に耐えられなくなって、王様が声をかけました。

「一週間前から北海道にいる弟子のところに行っててな、さっき店に戻ったとこなんだがな。」

王様が差し出した灰皿にキセルを打ち付けながら源助は話し始めました。

「それはそれは、今の時季、北海道は涼しくていいでしょう！」

ご機嫌を取ろうと、王様は調子よく返しました。

「いや～、新聞も1日遅れでくるような山奥でな。ずっと雨で寒いくらいだったよ。」

「そ、そうですか...。」

王様は愛想笑いに疲れてきたようです。

「それでさっき帰ってきたんだがな。」

源助は最初の話の続けました。

「うちの婆さんが腰抜かして寝込んでしまった。」

「えっ！ハツさんが！いったいどうしたんですか？」

王様はビックリしてしまいました。

源助の連れ合いのハツさんは、王様の母親である先代王妃の母乳が出ないとき、代わりに王様に母乳を飲ませてくれた、謂わば第2の母親でした。

「俺の留守中、代わりに掃き掃除してたらしいんだが、昨日の早朝に門まで来たら変な植木に追いかけられたそうだよ。」

「う、植木...ですか...。」

王様は冷や汗が出てきました。

「なんか心当たりはねえかなあと...」またひとつカーンと灰皿を打つと、源助は王様をジロツと見ました。「...思っ、お尋ねに伺ったんだがね。」

「あ...いや...その...。」

「何でも昨日は大捕物があったそうじゃねえか。で、捕まったのかい？お目当てのコソドロは。ん？どうした？すごい汗だな。床の砂糖が溶けてるぞ。」

王様は源助を正門まで見送りました。

「そういえば」

源助が王様を振り返って尋ねました。

「ここにRBなんとかってヤツはいるかい？」

王様は少し考えましたが、心当たりがありません。

「さあ、そんな変な名前の者はいなかったと思いますが・・・」

「そうか、まあいいや。大したことじゃない。それじゃな。」

源助はまたキセルをくわえると店へと帰って行きました。

最敬礼で源助を見送っていた王様ですが、足音が聞こえなくなると横にいた側近に向かって怒鳴りつけるように言いました。

「すぐにハツさんのお見舞いに行くぞ！手土産を用意しろ！」

「ははあ！いつもの砂糖菓子詰め合わせでよろいしですか？」

「ばっかもん！ハツさんは甘いものは嫌いなのだ！大好物の唐辛子がいっぱいついた草加煎餅を持っていくぞ！」

と、激辛草加煎餅を持って、急いでお城を出ていったのでした。

## 王妃のお買い物

---

「『病人にこんな刺激のあるものを持って来るな!』と追い返されてしまった。」

王様がしょぼくれて話すのを、王妃は黙ってきいてあげていました。

いつものことです。

普段は威張りまくっている王様も、源さんに怒られると途端に気弱になってしまいます。すると王妃が一晩中話を聴いてあげるのです。

結婚してからずっとです。王妃はこの時間が好きでした。王様が自分の前でだけ、本音を言って子供のように愚痴をこぼすのが、なんともかわいいと思っていました。時には厳しいことを言われて涙することもありましたが、王妃は王様を心から愛しているものであります。

「アレキサンドロスめ、二度とフルネームで呼んでやらんからな〜ムニャムニャ。」

王様はいつの間にか王妃の膝の上で眠ったようです。寝言では、今回の騒動の原因となった警備部長をずっと非難しています。

「首だけでは足りん、手足もチョン切ってやる...zzz」

次の日、王妃に愚痴を聞いてもらってスッキリしたのか、王様はいつも通り元気になっていました。

それを確認すると、王妃は侍女を伴い町へお買い物に出掛けました。王妃はこのお忍びのお買物が好きでした。国民生活を直に見るのも王族の大切な仕事だと思っているのです。

「なんでだめなのよー！」

お城を出て何歩も歩かないうちに、大きな声が聞こえてきました。王妃もよく知っている、お城の裏手にある小さな食品店からでした。覗いてみますと、店主と主婦らしき客が言い合いをしていました。

「いや...だからね、そういうのは受けられないって言ってんですよ。」

目を吊り上げている客に対して、店主はいたって平静に対処しています。

「なんて不親切なの! こんな店、もう来ませんからね!」

「そうしていただくと助かりますな。」

その客は、真っ赤な顔をして、入口に立っていた王妃を押し退けるようにして出ていきました。

「これは王妃様、見苦しいところをお見せしました。」

店主は一礼すると、またジッと王妃を見て、続けて言いました。

「今日もまた...なんといいですか、個性的なお召し物ですね。」

王妃はお忍びのときは目立たないように、前回町に出たときに買った古着を着るようになっていました。今日は、漢字四文字のロゴが入ったパンタロンに、王様の顔イラストのTシャツ、そしてピンクのサンバイザーといった出で立ちでした。特に王様のイラスト入りTシャツがお気に入りでしたが、のろけているようで恥ずかしいので、それには触れずにパンタロンの漢字ロゴを指して説

明を始めました。

「なんでも古着屋の店長さんが、この《電気醤油》の・・・あっこれロックバンドの名前らしいんですけどね。このバンドの大ファンだそうでして、許可をもらって自分で作ってるんですって。私、そういうのに疎いのでよく知らないんですけど、なんだかこのロゴが気に入らして、前回町に出たときに購入しましたの。」

よほど気に入ったらしく、嬉しそうです。

「はあ～、わたしも音楽には疎いもので、知りませんな。」

店主もそのバンドのことは知っていましたが、洋服の話題をそれ以上引っ張らないために、あえて知らないフリをしました。

「そうですか。ところでヨーちゃんさん、お客さんと言い争ってどうしたというのですか？」  
王妃もTシャツのことを言われる前に話を反らせました。

「ヨーちゃんさんはやめてくださいよ。」

店主は照れて言いました。お店の名前が“妖ちゃん商店”というので、店主は常連客から“ヨーちゃん”と呼ばれていました。王妃はそのことを最近知って、呼ぶようにしたのでした。

「いやね、キムチを買ったら辛かったから返金してくれって言うものですから、断ったんですけど、そしたら怒っちゃいました。」

苦笑しながら理由を話してくれました。

「まあ、なんて理不尽な！キムチが辛いのは当たり前なのに。」

王妃も驚いています。

「思ったより辛かったんだそうです。よくあることですよ。最近はどここの商店でも、お客様さまなものだから、客の方もいい気なもので、店員は何でも言うことを聞いてくれると思ってる。ほんとにこの消費者至上主義社会はおかしなもんですよ。こないだなんかね...」

ここの店主は、話し出すと止まらないので、侍女は「また始まった」という顔で王妃を見たが、王妃はニコニコとして話を聞いていました。

「だからうちはさ、俺の気に入ったものしか置いてないんですよ。俺は添加物なんか使って短期間で作ったまずい醤油なんか嫌だし、卵白で水増しして発色剤できれいなピンク色になったハムも食べる気がしない。だからそんなものは置いちゃいないんですよ。こういうのを自然食品店なんて言う人もいるけど、普通の食べ物置いてんだから、わざわざそんなこと言うのも変だし、俺はただの食品店だって言ってんですよ。こだわりまくっちゃって、あーだこーだ言う客もいますよ。そういう人には買わなくていいよって言ってんですよ。それにね...」

坦々としてはいますが、まったく話が終わる気配はありません。

すでに1時間近く経っていましたが、まだまだ続きそうな勢いです。たまりかねて侍女が、「王妃様、そろそろお時間が...。」と多少気を遣いながらも声を掛けました。

「これ、お買い物のおきは『幸子さん』と呼んでと言ってあるでしょ。それにお話し中に失礼でしょう。」

王妃は侍女に優しく注意しました。

「あ～、失礼しました！もうこんな時間だ。王妃様は熱心に聴いてくださるもんだからつい話し

過ぎてしまって。いつもながら申し訳ありません。」

ちょうど、常連客と思われる若いカップルが入ってきたので、王妃は失礼することにしました。ヨーちゃんは、休憩のときに飲んでくださいと紙パックのハーブティをふたりにくれました。紙パックが、缶・ビン・ペットボトルなどに比べて、一番リサイクル方法が確立されているというミニ解説つきでした。

「ほんとにヨーちゃんさんは、食品に対して愛情のあるよい方ですね。」

王妃は食品店を後にして歩きながら、とても楽しそうにしています。

「は、はあ。ちょっとだけ、お話が長いですかね...。」

侍女が遠慮がちに、少し顔をひきつらせながら応えました。

「とても真面目な方なので、熱が入ってしまうのでしょうか。王様が上白糖のお話をされるとときと似てますわね。」

王妃はホホホッと笑いながら、やはり嬉しそうにしています。

侍女は、あきれて苦笑いしかできませんでした。

しばらく歩くと、大きな公園に出ました。すごい人の賑わいです。

「今日は何かお祭りでしたかしら？お城には何も報せがなかったようですが。」

侍女が看板を発見して、「幸子さん、フリーマーケットだそうですよ。」と嬉しそうに言いました。

「まあ、それは楽しそうですね。ちょうどいいわ、次回のお買い物に着る洋服は、ここで買うことにしましょう。」

王妃も嬉しそうです。

ふたりがキャッキヤと笑いながら出店を見て回っていると、

「まあ！とっても個性的なファッションでいらっしやいますわね！奥さま！」

声を掛けてきたのは、手作り帽子を売っているという女性でした。

「そのステキなお洋服にサンバイザーはいただけませんわ。こちらなどどうでしょう？」

差し出されたのは、ニット帽でした。しかもすき間だらけの、“手作りの味”を通り越した素人作品でした。

侍女はビックリして、王妃にここはやめるように耳打ちしましたが。

「ステキ！」

王妃は目を輝かせていました。

「わたくし帽子選びだけはいつも自信がなくって。やはり専門家に選んでいただくのが一番ね。」

侍女は止めようとしたのですが、間に合いませんでした。

「お買い上げ、ありがとうございますーす！」

早速ニット帽を被って、王妃はご満悦です。

「よろしかったのですか？」

侍女の問いかけにも、「何がですか？」と不思議そうな顔で応え、またすぐに嬉しそうに手鏡を眺めていらっしやいます。

その後も、ふたりはたっぷり2時間も同じような調子でお買い物をして帰りました。侍女も王妃からいただいたお小遣いでたくさん買い物をして、大満足の様子です。

予定より遅くなってしまったので、今日は他には寄らずにもう帰ることにしました。

お城の近くまできて妖ちゃん商店の前を通ると、先ほど王妃達と入れ違いに入った若いカップルが、まだ店主と話していました。

「あれから2時間以上経ってますよ...。」

侍女は呆れていましたが、王妃は「そうね」と言っただけで、ニコニコしながらお城の裏門に向かって行きました。

## ロックンロール！

---

「王妃はどうした！まだ町から戻らんのか？もうランチが始まってしまおうぞ！」  
王様はイライラと歩き回りながら、さっきから何度も同じ質問を側近にしています。  
今日は月に一度、国民が王様と一緒に食事をしながら様々な陳情ができる『王様と一緒にカレーランチ』、通称『華麗(カレー)な王様』の日なのです。王様や王妃は、もっと簡単に『ランチ』と呼んでいます。

王様はこれが大の苦手なのですが、先々代の王様が「国民のために、末代まで続けるように」と決められたため、仕方なく開催していました。

この会には、王妃も同席することになっているのです。

「私ひとりではカッコがつかないではないか！まったく、そんなに頻繁に町に出て何が楽しいのだ！」

王様がグチグチ言っていると、王妃がニコニコ顔で現れました。

「王様、遅くなりまして申し訳ありません。さあ、ランチに参りましょう。私お腹がペコペコですわ。」

いつもは町に出るとカフェで一服するのですが、今日はお買い物に夢中で何も口にしていなかったのです。王妃は、ずっと待っていた王様を置いて、さっさと会場に入ってしまいました。

「皆さん、大変お待たせしました。定刻を15分ほど過ぎましたが、これより第999回目の『王様と一緒にカレーランチ』を開催致します。」

王様達が席につくと、待ち構えたように司会者が挨拶をしました。会場には、壁を背にランチテーブルを囲むように黒いスーツにサングラスの男達がズラリと並んでいます。皆、胸元には『華麗な王様実行委員会』のバッヂを付けています。

「本日のゲストは、ロック魂研究会の方々です。」

司会者に紹介されて、ロック魂研究会のメンバーは一斉に起立して王様に一礼しました。

「なお、今月と来月は、『王様と一緒にカレーランチ』1000回記念と致しまして、ゲストの皆さんにはお土産を用意しておりますので、帰りにお持ちください。では、本日のカレーライスについて、シェフから説明がございます。」

ロック魂研究会のメンバーは、司会者が手で示した先に注目しました。

お城のシェフは、3年毎に開催される選考会によって選出されます。トーナメントで勝ち残った候補料理人が、最終的に現役シェフと対決するのです。今のシェフは、連続4期目を務める凄腕です。

ゲスト達も噂に聞く敏腕シェフがどんな人物なのか興味津々でした。

そしてついにシェフの登場です。

「お、おお...？」

会場がどよめきました。

なんと出てきたのは、割烹着に三角巾姿の年配の女性でした。

シェフは、見えにくそうに眼鏡をいじりながら献立表を見て説明を始めました。

「え～本日のカレーライス、あ～先日、王妃様が外出された際に購入されましたネパールカレーのスパイスを使用しています。動物性油脂ではなくて、え～植物性油脂のみで作っています。あ～フェアトレードの輸入品ですな。」

前回のお買い物の際に、妖ちゃん商店で王妃が買ったものでした。

王様はフツツと笑って、「フェアトレードか」と小さな声で言いました。王様は、慈善事業の類には全く関心がないだけでなく、どちらかという嫌いでした。

「私はね、和食専門なもんでね、カレーなんかは実は好きではないんですがね。でもこれはなかなかおいしいです。作った自分で言うのもなんですがね、おいしいですよ。」

なぜか吐き出すようにそう言うと、シェフはさがっていきました。

「ん？そうか！ということは、今日はいつもの和風カレーではないのか。それなら少しは食べそうだ。」

王様は、また小さくつぶやきました。

和食が得意なシェフが作るのは、いつも出汁を利かせた、いわゆる蕎麦屋のカレーでした。それはもう絶品で、ゲストの受けもよく王妃も好きでしたが、西洋かぶれの王様は英国王室風カレーが好きでした。お城での食事もほとんどが和食で、うんざりしていました。

でも、なぜそんなに洋食が好きなら、洋食のシェフにしなかったのでしょうか？理由は簡単です。選考会では王様を含めて10人の審査員が判定するのですが、いつも王様は1対9で負けるのです。この判定の仕方も昔からの決まり事のため、王様には変えられないのでした。

「それでは皆さん、打ち合わせ通りにご唱和願います。」全ての席に配膳が終わると、司会者がきりだしました。

これも古くからの慣わしで、みんな揃って「いただきます！」と言ってランチの始まりです。

「ところで…」

スプーンを手に取ると、王様は会場をチラ見しながら言いました。

「ロック魂研究会などというのと、その～もっとロッケンロールな服装や髪型を想像していたが…なんか違うなあ。」

確かに、ロック魂研究会のメンバー達は、まったくロックを感じさせないスーツ姿に、今どき珍しい七三分けの人も多かったのです。

「私たちは元々、国内外の超有名大学を優秀な成績で卒業したエリートばかりのグループです。私たちにとって“ロック魂”などというものは、ヒッジョ～に理解しがたいわけのわからないものなのです。だから、誰もあんなバカげた格好などいたしません。しかしながら、私たちエリートに理解できないものなどこの世界にあってはならないこと。そこで逆に研究してみようということになり、研究会を立ち上げたのです。」

上座近くに座っていた男性が、神経質そうにメガネを直しながら発言しました。彼は名前を有坂といい、自分はこの研究会のリーダーだと自己紹介しました。

「あ、そう。」

王様はちょっと思っただけで大して興味もなかったもので、そう素っ気なく応えると、一口目のカレーを口に運びました。

そのときです。

「ちょっと待った〜！」

大きな声に驚いて、みんなスプーンを落としてしまいました。

「な、なんだ！」

王様が叫ぶと、会場にいた全員の視線が注がれる中、入口の扉がそ〜っと開きました。

姿を現したのは警備部参謀長官の伊達でした。さっきの威勢のよい声とは逆に、困った顔をしています。

「何事だ！ランチ中に！」

王様はすごくビックリしたので、それを隠すために大きな声で怒鳴り付けました。

「はあ、あの...。」

伊達はさらに困った顔をして、視線を下に落としました。それにつられて王様が伊達の手元を見ると、なんと昨日処刑した警備部長の首を持っているではありませんか。

「アアア、アレキサンドロスではないか！」

王様はまたもやビックリ！

「王様、アレキサンドロス金剛でございます。お城の危機に、地獄から舞い戻ってまいりました。」

首だけになった元警備部長は、低く渋い声で言いました。

「嘘つけ！昨日、処刑の後に居酒屋でくだをまいていたと聞いておるぞ。居酒屋から帰ってきただけだろう？」

少し落ち着きを取り戻した王様が冷たく突っ込みましたが、元警備部長は聞こえないふりをして話し続けました。

「わたくしが昨晚、朝までかけて集めた情報によりますと、本日のランチには蟻のメンバーが紛れ込んでいる可能性があります。」

その発言に、会場は騒然となりました。

「なんだと！...まさか復帰するために、一晩かけて考えたウソではないだろうな！」

王様は信じようとしません。

「とんでもない。わたくしアレキサンドロス金剛、首だけになっても王様への忠誠は変わりません。この情報は確かなものです。」

部屋の隅でじっとことの成り行きを見守っている老人がいました。彼は、以前は先代の王様の側近として仕えていました。今の王様が産まれてすぐに専属の側近となり、現在は皇子、皇女のお世話もしています。そしてこの『華麗な王様』も、彼が実行委員長として取り仕切っているのです。

老人は王様と元警備部長のやり取りをしばらく聴いていましたが、意を決したように口を開きま

した。

「お待ちください！」

静かだか会場中にはっきり聞こえる声が響きました。

今度は全員が老人の方を見ました。

「どうした？ジイ。」

王様が尋ねました。

ジイと呼ばれた老人は、数歩前に出ると王様に一礼して続けました。

「王様に申し上げます。ランチにお呼びするゲストの審査は、このジイが責任を持って行っております。どんなに人数が多くても、ひとりひとり身元を調べております。」

老人は、ゆっくりと視線を入口にいる元警備部長の方に向けました。

「アレキサンドロス金剛殿、まだ何かございますかな？」

元警備部長は、老人の鋭い視線に気圧されて反論できませんでした。

しばらくしてやっと、「伊達、帰るぞ...。」と絞り出すように言いました。

伊達はペコペコと頭を下げながら退室していきました。

「皆さま、大変失礼致しました。会の余興だと思ってお忘れください。ささっどうぞ、せっかくの新作カレーが冷めてしまいます。」

老人は、うって変わった柔和な笑顔でそう言うと、先程と同じ部屋の隅へと戻っていきました。

「ところで、アレキサンドロス金剛様。先程の情報は、いったいどちらでお知りになられたのですか？」

休憩室の自販機で買った、酔い醒ましのトマトジュースを差し出しながら伊達が尋ねました。

「昨日居酒屋で、有名な占い師と相席になってな。本を何冊も出していて、最近ではテレビなんかにも出ているそう。キワコって言ったかな。知ってるか？そこの店主にも確認してみたが、よく当たるそう。あのジイさんさえ邪魔しなきゃ捕えられたかもしれないのに、チクショー！」

「う、占い...ですか？」

伊達はこれまで、勇敢な元警備部長のことを尊敬していましたが、今後は付き合い方を考えようと心の中で思いました。

「おい伊達！ちょっと飲ませてくれ。やっぱり首だけってのは不便だなあ。」

16時すぎ。ハプニングのため予定の時間を少しオーバーして、『華麗（カレー）な王様』がお開きになりました。

ゲストのロック魂研究会のメンバー達は、お土産に王様の顔を模したザラメコーティングの特大クッキーをいただいてお城を後にしましたが、リーダーの有坂だけは先程の老人に呼び止められてゲストの控室に残りました。

「あのアレキサンドロス金剛とかいう男、どこから情報を仕入れてきたのかしら？」

先に口を開いた有坂の声は、女性のものでした。

「彼は優秀な戦士ではあるが、ちと頭は弱い方でな。きっと王様がおっしゃられたように、一晩かけて考えた方便だろう。気にする程ではない。」

老人は淡々と応えました。

「先だっの植木兵には驚いたわ。皇子様のアドバイスと貴方の手引きがなければ危ないところでした。」有坂はメガネを外すと、上着の内ポケットから地図のようなものを取り出すと、テーブルに広げました。

「王族と限られた側近しか知らない秘密の通路とはね。内戦時代の遺物ですか？」

地図はお城の見取図でした。赤い線で数ヶ所通路のようなものが描かれていて、それはお城の外まで続いていました。

「いつ作られたものか、もう定かではない。そんなことより、いつまでこのようなことを続けるつもりだ？」

窓の外を眺めていた老人は、有坂の方に視線を移して言いました。

「君を若様の家庭教師に選んだのは、国民のために広い視野を持っていただきたかったからだ。こんな盗賊まがいのことに加担させるためではない。」

「でもあなたは先日も私達を手助けしてくれ、さっきだって...」

「若様のためだ！」

有坂はメガネをかけなおし、鏡を見ながら髪型を整えました。

「あなたの希望通り、皇子様はグローバルな視点をお持ちになり、国民の...いや地球の将来のために、王様の不健康極まりない嗜好を止めさせようとしていらっしゃいます。よかったではないですか。では、また連絡いたします。」

有坂は出口に歩み寄りノブを掴んだところで、思い出したように振り返ると「今日のカレーは本当においしかったわ。」と微笑んだ。

そしてスッとドアを開けると、「本日は王様との謁見を叶えていただきまして、まことにありがとうございました。我々一同、今後の活動の励みに致します。」と、一礼して去っていきました。

。

もう、男性の声に戻っていました。

その日の夜、老人は皇女の部屋へ来るようにとの伝言を受けました。

皇女は何か個人的に頼みたいことがあると、夕食後に老人を自室へと呼ぶのが常でした。

いつものことではありますが、今日は元警備部長の発言や有坂との密談といったこともございましたので、老人も少しピリピリしながら皇女の部屋へと向かいました。

ノックすると、侍女が「どうぞ」と招き入れてくれました。

皇女は思い詰めた表情でソファーに座っていました。老人はその様子に驚いて駆け寄りました。

「姫様！どうなされたのですか？」

皇女はやはり呆けたような顔をして、老人の顔をジッと見ると小さな声で言いました。

「ねえジイ、夕方に話をしていたスーツの方は誰？」

老人は、表情には出しませんでしたが、内心ヒヤリとしました。

(見られていたのか)

「あの方は、本日のランチのゲストです。ロック魂研究会のリーダーをされていて、終了後に少し雑談致しておりました。」

老人は平静を装いました。

皇女は依然として、老人の顔を見つめたままです。

老人は、皇女が何か感づいたのかもしれないと内心焦っていましたが、それを悟られまいと必死でした。

それはとても長い時間に感じられました。

「...テキ...」

「はっ？」

老人は皇女の声があまりにもか細いので聞き返しました。

「あの方...、ステキね〜。」

「えっ？」

今度ははっきり聞こえましたが、言っている意味が理解できません。

「聡明で礼儀正しく、そしてあのメガネがとってもよくお似合いで...ステキだわ〜。」

もはや皇女は老人ではなく、宙を見て呟いています。

老人は、皇女がやせ形のメガネ男子が好みなのを思い出しました。

「あの方、お名前は？どこに住んでいるの？お仕事は？家柄はどうかしら？納豆におネギを入れるの好きかしら？足のサイズは何センチ？帽子に羽根を付けるの好きかしら？お父様とお会いしたときの様子は？ランチのカレーは美味しかった？ジイとは気が合いそう？そうだ、ジイと結婚しちゃえば？あーっ、わたくしったらまだお話もしたことないのに結婚だなんて！ジイ何てこと言うの！」

皇女は、立て続けに老人に質問して行って、最後には自分でも何を言っているのかわからなくなっていました。

「ひ、姫様！それが...あの〜、有坂様は...えっと...ご結婚されていて...」

老人は、皇女に何とか諦めさせねばと思い、シドロモドロしながらもそう進言しました。

「有坂様とおっしゃるのね！ロック魂研究会の有坂様。それだけわかれば、後は隠密機動隊に探らせます。下がってよいぞ、ジイ。」

急に冷静な口調になった皇女は、侍女に指示を出し始めました。

その様子に、皇女の本気度を感じた老人は焦りました。お城の誇る隠密機動隊の手にかかれば、さすがに有坂の正体も暴かれてしまうでしょう。

(これは何とかしなくては)

「姫様、お静まりください！いくら姫様のご意向といえども、隠密機動隊をそのような私的なことに使ってはなりません！それに若様が戻られぬ以上、姫様のお相手は将来、皇太子となられるかもしれないのですよ。一般市民から簡単に選べるようなものでは……姫様？」

「あの方が皇太子に…次の国王に…はぁ～ステキだわ～」

皇女はとうとう妄想の世界に入ってしまいました。老人は大きく嘆息すると、心配そうに見ていた侍女達の方を見ました。

「今夜はこのままにして差し上げておこう。」

実は皇女の惚れ易さは以前からなので、ある程度慣れていました。妄想の世界に入ってしまうえば、後は勝手に自滅することが多いのですが、そこまで誘導するのがひと苦労なのでした。

「今回もなんとか収まりそうだな。」

「はい、いつもありがとうございます。」

侍女はお礼にお菓子を差し出してくれましたが、これから夕食なのでと断って皇女の部屋を出ました。

有坂は夜遅くなってから、雑居ビルの一室にあるロック魂研究会の集会所に帰ってきました。奥のドアを開けるとロッカールームになっています。そこでスーツを脱ぎカツラを外すと、下から長い髪が現れました。着替えが終わると少し大きめのロッカーの前に立ち、扉を開きました。そこには地下に続く階段があります。

地下の部屋では10人ほどが忙しそうに動き回っています。その中には、先ほどランチで見かけた顔も数人いました。

一番奥にはガラス張りの会議室らしき部屋があり、そこでも打ち合わせをしている人達がいま

。彼女が入っていくと、ひとりの男性が気づいて立ち上がりました。

「先生、お城の…父の様子はどうでしたか？」

「ただいま戻りました、皇子様。実はちょっと予想外のことがありまして、王様とはあまりお話しできませんでした。」

有坂は、特に残念そうな様子も見せずにそう応えました。

「やはりロック魂研究会では、環境の話題に持っていきにくかったですかね。あまり警戒されないように考えたんだけどな。ところで、予想外のことは？」

ロック魂研究会として『華麗な王様』に参加し、お城の様子を探るというのは、皇子の発案だったようです。

「アレキサンドロス金剛という男が、我々の情報をどこからか仕入れてきたようでして、ジイヤのヘルプがなければ危ないところでした。」

皇子はそれを聞くと、少し笑いながら言いました。

「彼は勇敢な戦士ですが、頭脳プレータイプではない。気にするほどではないでしょう。」皇子が側近の老人と同じようなことを言うので、やはりそうなのかと安堵し、彼女も一緒に笑いました。しかしすぐに真顔になると、「皇子様、そろそろ最終段階に入ろうと思います。」

皇子と一緒にその場にいた他のメンバーにも緊張が走りました。

「はい。では早速、草案を聞いてください。」

皇子はすでに準備していた資料を差し出しました。

「自転車が盗まれた～！」

お城の門番の元に、向こうの通りに住む怪貝さんが大慌てで走ってきました。

怪貝さんは王様の幼馴染みで、よくお城にも遊びに来ているので、門番も顔見知りでした。いつもは白シャツ、半ズボンに大きな蝶ネクタイを付けて、ニコニコしているのですが、今日は寝間着にサンダルで血相を変えています。

「怪貝さん、おはようございます。泥棒は警察に言ってくださいよ。それに自転車なんてまた買えばいいじゃないですか。お金持ちなんだから。」

門番は、最初の頃こそ王様の幼馴染みということで敬語を使っていましたが、怪貝さんが気さくに話してくると、元来のテキトーな性格もあって、最近では気軽に話すようになっていました。

「た、た、た、ただの自転車じゃないんだよ！ゲホッ...オークションでやっとなごホッ...やっとな手に入れた、おえ～っ！電気醤油バイバイバイ...バイセコーなんだ！」

怪貝さんは息を切らせて、時々咳き込みながら言いました。

「ええ！電気醤油バイセコーって、電気醤油の全曲が自動的にダウンロードされて、漕いでいる間だけ爆音で再生される、世界に一台っていうあの電気醤油バイセコーですか？10億円で落札されたって聞いたけど、あれって怪貝さんだったんですか？スゲー！」

門番は電気醤油の大ファンだったので、すごく羨ましがりました。

「それならなおさら警察でしょう。」

怪貝さんは頭をブルンブルン振って言いました。

「実は落札後にさらに改造して飛べるようにしたんだ。」

「飛べるって空をですか？そりゃまたスゲー！」

門番はさらに驚きました。

「そうなんだよ。さらに5億円くらいの付加価値がついた。でも、これが違法改造でね～。警察に知られるとまずいんだ。なんとか力を貸してよ～。なあ。」

門番は困ってしまいました。お城の門番が違法改造に手を貸したとなれば大問題です。でも、電気醤油バイセコーを泥棒の手に渡すのも悔しい。

その煮え切らない様子を見てイラついた怪貝さんは、「よし！協力してくれたら、3日...いや1週間、電気醤油バイセコーを貸そうじゃないか！」

途端に門番の目が輝きました。

「怪貝様、私にお任せください。おのれこそ泥め！俺の電気醤油バイセコーは必ず取り返してやる！」

顔つきも声も、突然頼もしくなりました。

「いやー、頼もしい。でも僕のだからね。」

そこに見回りの警備部員が近づいてきました。

「こら！勤務中の私語は禁止だぞ！」

門番は急に腹を抑えると、

「イッテー！！イテテテ！！何だいきなり腹が痛いぞ！何だろう盲腸かなあ！それとも腸捻転とか！きっと命に関わる病気に違いない！申し訳ありません先輩、早退して入院してきます！」

言い終わらないうちにダッシュで駆けて行きました。

「大事にしろよ〜。」

見回りの警備部員はそう言うと、代わりに門番になりました。

「門番く〜ん！待ってよ〜！」

怪貝さんが必死で元門番の後を追って来ました。

「き、君！そんなに勢いよく駆け出したはいいけど、自転車泥棒の居場所はわかるのかね？」

元門番はフツと笑うと、帽子を取りました。

「き、君は！」

怪貝さんは驚きました。帽子の下からは、半球体のガラスに囲まれたコンピューターのようなものが現れたのです。

「実は俺、ある科学者によって作られたアンドロイドなんです。事情があってそこを飛び出し、人間に成り済ましてお城の警備部に就職したんですよ。」

それを聞いて、怪貝さんの顔が険しくなりました。

「貴様、何の目的でお城に潜入したんだ！」

怪貝さんは、幼馴染みである王様を狙う敵ではないかと身構えました。

「給料良かったし、寮が完備してあるって募集要項に書いてたもんだから。やっぱ寝床は必要でしょう。あんなに暇だとは思いませんでしたけどね。ほら、着きましたよ。」

元門番は、隣町の雑居ビルの前で立ち止まりました。

「俺の超高性能レーダーによると、電気醤油バイセコーはこのビルの中です。」

怪貝さんは、ゼエゼエ肩で息をしながら、そのビルを見上げました。

「上の事務所に侵入者です。」

報告を受けた有坂は、ふっと笑みをこぼしました。

「意外と早かったわね。皇子様、ちょっと行ってきます。」

そう言うと、地上へ上がる階段へと向かいました。

「奥に部屋がある。」

元門番と怪貝さんは、ロッカールームへと入って行きました。

一歩足を踏み入れた途端、人の気配を感じて身構えました。右側の壁に影が現れ、

「久しぶりね、RB-CO2。」

影はそう言うと、ゆっくり近づいてきます。

「RB-CO2って？」

怪貝さんは、元門番と影を交互に見ながら訊きました。

「俺のロットナンバーです。それを文字って、お城では『阿部こーじ』って名乗ってましたがね。そのナンバーを知っているのは、限られた人間だけです。この声は…」

現れたのは有坂です。

「み、ミスズお嬢…様。」

元門番は険しい顔でそれだけ言うと、先が続かなくなりました。

「久しぶりに会ったのに、そんな顔しないでよ。」

怪貝さんは、またまた蚊帳の外です。じれったくなって説明を求めました。

「彼女は俺を造った科学者の娘です。なんでお嬢様がこんなところに。」

元門番は小さな声でやっと答えました。

「あんたに頼みたいことがあってね。ちょっと仕掛けさせてもらったの。もちろんきいてくれるわよねえ、わたしのオ・ネ・ガ・イ。」

有坂の手元が、一瞬光りました。

王妃は、町で購入した古着は着る前に一度洗濯することにしていました。他人が着ていたことが気になるというより、前の持ち主が使っていた洗剤の臭いが合わないようです。でも今回の洗濯はかなり苦戦して、大変だった様子。

汗だくになってテラスで干していると、庭でウロウロと落ち着かない様子の王様が見えました。

「王様！どうなさったのですか〜？」

王様は大きな声に驚いてキョロキョロしていましたが、王妃を見つけるとキリッとして返しました。

「どうしたのだ？そんなところで。」

「町で購入しました古着を洗濯しておりますの。今回は珍しくかなり汚れておりまして、洗っても洗っても青い水が出るんですよ。」

嬉しそうにそう言うと、王妃は十分に脱色されたジーンズを広げて見せました。

「王妃はきれい好きだからな。」

「はい！」

「はははははっ！」

「ほほほほほっ！」

ひとしきりふたりに笑ったあと、王妃が改めてどうしたのか王様に訊きました。

「実は、今日は怪貝くんが遊びに来る予定なのだが、まだ来なくてな。一緒にレモネードを楽しもうと思って、庭に5000杯分のビッグ角砂糖を設置させたのに。」

「まあ珍しい。いつも時間に正確な方ですのに。」

王妃も心配しました。

すぐそこなので、いま人を見にやったところだそうです。

王妃が庭に降りて来たところに、使いの者が怪貝さん宅から帰ってきました。

「ご報告致します。怪貝様は、2日前に自転車を盗まれたと言って家を飛び出したまま、まだ家に戻っておられないそうです。警察にも捜索願を出したところで...王様？」

報告を聴いている間、王様と王妃はイチャイチャとしていましたが、呼ばれるとすぐにまたキリッとした顔になり、怪貝さんと自転車の捜索隊を組織するように指示をしました。

王妃はその様子を見て、「やはり王様はお友達想いの優しいお方だわ」と惚れぼれとしていました。

そのときでした。

ドーン！と大きな音が正門の方角から聞こえてきました。

「な、なんだ？」

驚く王様の元に、近くに控えていました特別警護班が駆け寄りました。

「ひとまずお城の中へお入りください。何が起こったのか、ただいま情報を集めております。」

「わかった。王妃、中へ入ろう。」

王様達は急いで庭を後にしました。

## アンドロイド

---

「RB-CO2くん！...はぁはぁ...待ってよ～！どうしたんだい、突然走り出して！」

怪貝さんはまたもや元門番を走って追いかけていました。

「すみません怪貝さん。いま、俺には何ともできないんです。あっそれと、RB-CO2は言いにくいから阿部でいいですよ。」

元門番は、意思とは関係なく体が動いているようです。

「えっとじゃあ、“門番の阿部こーじくん”でいいかな？」

「余計に長くないですか？別にいいですけど。」

そんなことを話ながら、ふたりは走り続けました。

あの夜、有坂の手元が光った瞬間、元門番は動けなくなってしまいました。

「な、何を！」

有坂は表情も変えずに近づいて来ました。右手には、小さなリモコンのようなものが握られています。

「ちょっと身体機能を停止させただけ、何もしないわ。しばらくここに居てちょうだい。そこのおじ様もね。」

怪貝さんは、「はっ」と思った瞬間、後ろから口を塞がれ、そのまま眠ってしまいました。

気づくと同じロッカールームでしたが、目をつむって起動停止した元門番が上に乗った状態で動けなくなっていました。

それが先ほど、急に目を開いた元門番が立ち上がると、ロッカールームの壁をぶち破り走り出してしまいました。怪貝さんはそれを追いかけて来たのですが、30分近く走ってやっと追い付いて話しかけることができたのでした。

「それにしても怪貝さん、俺のスピードについてこれるとは大したものですね。」

元門番は感心して言いました。

「実は3年前に心臓を患ってね、人工心臓になったんだけど、一番高いのにしたらアスリート用だったもので、文字どおり鉄の心臓になったのよ。ただ筋力の方はなかなかついていけないから、少しずつ強化してるんだ。」

「どうやって？」

「脚や腕に電動アシスト装置を着けて、実際の力の10倍のスピードとパワーが使えるようになっている。」

「そりゃーすごい！でも、それにしても息が上がってますけど？」

「肺はそのままだから。普段はこんなに走ることはないもの。次は人工肺臓にしないとだな。ところで、あの女の子は何者だね？お嬢様とか言ってたけど。」

怪貝さんは、先日から気になっていたことを訊ねました。

「彼女は、俺を作った科学者の娘でミスズさんです。俺がドクターのラボを飛び出したのは、彼女にアゴでこき使われるのが嫌になったからです。どうして居場所がわかったんだろう？」

元門番は苦い顔で答えました。昔の嫌なことを思い出してしまったようです。

「そんなに嫌いなのに、今でも“お嬢様”とか“ミスズさん”って呼ぶんだね。」

「そうプログラムされてるから仕方ないんですよ！」

「そうなんだ。アンドロイドも大変だね。それにしても、あの娘どこかで見たような。どこでだったかなあ。うーん、最近物忘れがひどくなっちゃって、脳にもコンピューターを組み込むか...。」

怪貝さんがブツブツ言っている間に、ふたりはお城の前まで来ていました。

「あれ？お城だ。門番の阿部こーじくん、門番に戻るのかい？」

怪貝さんが元門番の顔を覗き込むと、目を赤く光らせて苦しそうにしています。

「怪貝さん、俺から離れてください。」

「え？」

「早く！もう...制御できません...ウオーッ！」

元門番は叫び声をあげると、なんと巨大ロボットに変形してしまいました。

怪貝さんはあまりに突然の出来事に目を丸くしました。

「門番の阿部こーじく〜ん！どどどどうしたんだ？ていうか、何で僕より背が小さかったのに、あんなに大きく変形できるんだ？アンドロイドってすごいな〜。」

巨大化した元門番は、お城に突進していくと、正門を破壊してしまいました。

その爆風で怪貝さんは吹っ飛ばされてしまったのでした。

すぐに警備部の部員が対抗しましたが、まだ新しい警備部長も決まっていないため統率がとれません。

「このままではお城内部にまで侵入されてしまいます！」

部員が参謀長官の伊達に報告しました。

しかし伊達は執務室でパソコンに向かったままです。

「警備部長が空席の今、伊達参謀長官が指揮をとっていただかなくては困ります！」

痺れを切らせて先ほどの部員が大声をあげたその時。

「よし、できた！行くぞ。」

伊達はパソコンを持つと執務室を後にしました。

お城には外門と内門があり、その間には1000メートルほどの中庭があります。

伊達が内門に駆けつけたとき、巨大ロボットはもうその真ん中辺りまで来ていました。

伊達はノートパソコンを開くと、物凄い勢いでキーボードを叩き始めました。

先ほどの警備部員が、横でアンテナのようなものを持たされています。

「伊達参謀...これは何を...。」

「後で説明する。よし、送信だ。」

そう言うと、伊達は顔を上げて内門まで100メートル弱程度に近づいたロボットを見つめました。変化はすぐに表れました。ロボットの動きが止まり、苦しみ出しました。

「伊達さん！これはいったい！」

アンテナを持っている警備部員が、驚いて訊ねました。

「あのロボットの頭脳に侵入してね、プログラムを書き換えたんだ。元は温厚な性格だけど、暴走プログラムが組み込まれていたんだ。それを削除しただけだから、意外と簡単だったね。」

それを聞いて、アンテナを持っていた警備部員はある噂を思い出しました。

「そう言えば、10年前くらいに小学生のハッカーがお城のコンピューターに侵入して、公にはならなかったが、国が存亡の危機に立たされたことがあったとか。その少年の名前が、確か伊達なるとか...」

「ははは、伊達なんて名前ざらにいるよ。そのとき僕がいれば対決したかったな〜。」

伊達奈緒人。若冠22歳にして警備部ナンバー2の参謀長官。

中学生のときに当時の警備部長にスカウトされ、史上最年少で入部。公式な採用理由は「優秀な人物だから」としか伝えられていない。学校に通いながらも係わらず頭角を表し、2年後には参謀に入り、アレキサンドロス金剛が警備部長に就任した際、参謀長官に登用された。

ロボットは変形を解除し、徐々に小さくなっていきました。

「もう大丈夫だ。行ってみよう。」

ふたりは小さくなったロボットの元へと歩いて行きました。

「おや？君は阿部くんじゃないか。病欠だと聞いていたけど。」

膝をついた状態でボーゼンとしていた元門番は、ゆっくりと伊達の方を向くと、寝ぼけたような声で言いました。

「あ〜、、、伊達参謀長官...。すみません。俺、何したんでしょう？」

それから周囲を見回すと、あまり良くない雰囲気だということを察したようです。

「クビになると、察は出なきゃですよ〜ね...。」

## 侵入

---

お城の地下3階には、お掃除隊の事務所があります。

ただのお掃除係ではありません。『隊』と付くくらいなので、お掃除のスペシャリスト集団です。

「正門から侵入者があり、外門が破壊されたい。警備部から上級清掃班の出動要請だ！」  
無線連絡を受けた副隊長が大声で叫びました。

「ほう、そんな骨のある侵入者は何十年ぶりかの〜。」

そう呟いたのは、休憩用のベンチに座って手拭いで汗を拭いていたベテランのおじいさんでした。  
今日は、部下に集めさせたお城中のゴミを仕分けし直していました。

最近の若い奴等は、仕分けもロクにできない。

紙は何でもリサイクルできるわけではない。ビニルコーティングされているものは、燃えるゴミに分別する。ガラスビンも、化粧品の容器なんかは別にして出す。もちろん自治体によって違うがな。

こんなことを細々と教えても、メモをとるでもない。まったく、仕事を覚える気があるのか無いのかヘラヘラしやがる。

そんなのに比べたら、正面きって突っ込んできて、正門ぶっ壊すくらい活きのいい侵入者の方がよほどマシだ。

「それじゃ、ちょっと行ってくるか。ついでにその侵入者の面も拝んできますよ、副隊長殿。  
おい、マツにタイゾウ！準備はできてんだろうな！」

さっきまで仕分けを教わっていた2人は、すでに後ろに控えていました。

「はっ、もちろんです。」

「やっと清掃班の仕事ができます。」

「バカ野郎！これも基本はいつもの掃除だ。仕分けもまともにできない奴等が舐めたこと言うんじゃねえ。行くぞ！」

3人は疾風の如く走りだし、事務所を後にしました。

「さて、隊長に報告してくるか。今日はC-21トイレだったな。」

副隊長は、ひとつ上の階でトイレ掃除をしている隊長の元へと向かいました。

トイレ掃除のときは集中したいからと、全ての通信機器を置いていってしまうので副隊長はいつも困らされていました。

ガタッ

「ん？なんだ？」

上の階に行く階段脇の部屋は倉庫になっていました。

音はそこからのようです。

お城の各部屋はほぼ全て目紋認証キーになっていましたが、古い倉庫などは南京錠のままのもの

さえあります。この部屋もそのひとつでした。

副隊長は腰から下げてある鍵の束から一本抜き取ると、部屋の鍵を開けました。

ずっとほったらかしのゴミ捨て場のような倉庫で、ドアを開けるとカビ臭いにおいが鼻をつきました。

「誰かいるのか？」

電灯を点けようとスイッチを押すと、バチンッと音がして電球が切れてしまいました。

「今度ライトを付け替えて、この部屋もそろそろ片付けないとな...」

そう言うと副隊長は、また鍵を締めて隊長のいるトイレに向かいました。

足音が聞こえなくなると、倉庫の中で倒れたまま放置されているロッカーの扉がゆっくりと開いて、ひとりの男が現れました。

男は周囲を窺うように見回すと、ロッカーに向かって声をかけました。

「先生、気を付けてください。足場が悪いですから。」

「まあ、ここじゃなんだから、とりあえず取調室に行こうか。」

伊達は元門番を拘束している警備部員に声をかけました。

「もうすぐ上級清掃班がやってくるから、邪魔にならないように城内に戻ろう。」

お城の方に歩き始めたとき、一陣の強い風が吹きました。砂ぼこりが治まると、3つの影が外門の辺りを飛び交うのが見えました。素早く瓦礫を片付け、みるみると門が再生されていきます。

「おおー！」

警備部の者達も、上級清掃班の仕事ぶりをつぶさに見るのは初めてで、鮮やかな動きに目を奪われました。

途中、ひとつの影が作業を抜けて、警備部員達のところへやってきました。さっきのおじいさんです。

「門を壊したのはどいつだい？」

伊達に訊ねると、後ろで拘束されてグッタリしている元門番を見つけました。

「こーじじゃねえか！最近見ないと思ったら...。まあいい、お前がこれほど骨のある奴だとは思わなかった。シャバに出られたらうちにこい。面倒見てやる。」

「おじさ〜ん。ウルウル...」

元門番は、おじいさんと仲が良かったのでした。

「泣くな気持ち悪い！それじゃまたな。」

そう言うと、再び門を修復する影のひとつとなりました。

「3時間であの門を修復するとはさすがだな。」

伊達は執務室の窓から正門を眺めていました。

粉々に破壊されていた門が以前と同様、いやそれ以上に美しく修復されていました。しかも今後  
に備えて強度を3倍にし、迎撃用のロケットランチャーまで搭載させたと、先ほどのお掃除隊から  
報告を受けたところでした。

「取り調べの方はどうなってる？」

途中経過を報告にきた部員に訊ねました。

「はい、聴取には素直に応じています。ただ、門を壊したことなどは覚えていないというんで  
すよ。」

「暴走プログラムが発動してからの記憶は無いだろうね。彼が病欠してからのことを訊いてみて  
くれ。」

「はい。それにしても、阿部の奴がアンドロイドだったとは...」

「あ〜、それは分かってたんだけどね。」

「えっ！ご存知だったのですか!？」

驚く部員に伊達は坦々と応えました。

「だって入部のときに身体測定するだろ？彼のときは僕がやったんだけどね。彼は巧みに自分の  
能力を隠していたけど、特に太ってるわけでもないのに身長165cmで体重200kgはさすがにおかし  
いだろ？いつか役に立つかもしれないと入部を許可したんだが、こんなことになるとは。気のい  
いやツだったから大丈夫だと思ったんだけど、もっとちゃんと検査するんだったな。」

取調室では、元門番がことの成り行きを話していました。

「実は怪貝さん、あついや、怪貝様が自転車を盗まれたからなんとかしてほしいと言って～じゃなくて、おっしゃいまして...。」

怪貝さんは王様の幼馴染みなので、気安く呼んでは怒られてしまいます。慣れない敬語でたどたどしく説明していました。

「自転車!？」

その場にいた全員が驚きました。

「そそそ、それがただの自転車じゃないんですよ！」

コンコンッ

ドアを叩く音に、側近の老人は目を覚ましました。

さっきまで侵入者のことであちこち対応に追われていたので、疲れきって椅子に座ったまま眠ってしまっていたようです。

コンコンッ

またノックの音が響きました。

「どうぞ。」

老人は少し乱れた衣服を正しながら応えました。

入ってきたのは、若い男性です。

「若様！」

老人は飛び上がって、皇子に駆け寄りました。

「よくご無事で。戻ってきていただけたのですね。ジイは嬉しゅうございます。王様にはもうお会いになられたのですか？」

今にも泣き出さんばかりに目を潤ませていると、後ろで「コホンッ」と咳払いが聞こえました。微笑を浮かべながら立っていたのはミスズでした。

「私も居りますのよ。」

老人は表情を引き締めると、ふたりを部屋の中へと招き入れました。

「また、あの通路を使ったのか？」

お茶の準備をしながら老人が訊ねました。

「今回は違う通路にしてみました。同じ所を何度も使えませんか。」

「あい変わらず用心深いな。あの侵入者騒ぎも君の仕業だろう？注意を反らすために。」

「さあ、なんのことでしょう？」

老人はふたり分のカップを用意すると、ストレートティーを注ぎました。

「そろそろ若様を返してはくれまいか？」

「それは人聞きが悪い。まるで私が皇子様を騙しているみたいじゃないの。私達が、皇子様のお手伝いをさせていただいているんですよ。」

「貴様ぬけぬけと！」

老人はカッときてミスズに掴みかかろうとしました。

「ジイ、止めないか！先生の言う通り、これは私が考え、先生に協力してもらっていること。」

「若様は騙されているのです！」

皇子と老人が言い合っているのを横目に、ミスズは「ふっ」と微笑を浮かべました。

一ここまできたら、もう皇子は必要ない。返してあげてもいいかなー

「先生、何か言いましたか？」

皇子が問いかけました。

「いえ、何も。」

ミスズはニコッと笑いかけると、老人に向き直って言いました。

「さて、王の間に案内していただくかしら。」

「王の間？王様に何をやる気だ！」

老人は気色ばんで言いました。

「先生、父の所へは私が案内しましょう。ジイ、先生は父上に環境対策についての直談判をされたいと言っているのだ。」

「ふっふふふふ。あははははははははっ！」

ミスズは皇子のセリフを聞いて、可笑しさを我慢できずに笑い出しました。

「せ、先生？」

皇子も驚いています。

「ああ、ごめんなさ〜い、つい笑っちゃって。皇子様って本当に純粹でいらっしゃるのね。このままじゃ、王位を継いでも変な女に騙されて権力握られちゃうわね。」

「ど、どうしたんですか？先生。」

ミスズはもう皇子の声を聞いていませんでした。

「ジイさん、私が行きたいのはあんな砂糖馬鹿のどこじゃないの。初代の『王の間』よ。あなたなら知ってるでしょう？」

老人は驚きを隠せず、目を見開きました。

「初代の『王の間』。それを...どこで...。」

ティカップを持ったまま窓の方へとゆっくり歩いて行ったミスズは、クルッとこちらへ向き直り老人を見ました。

「家庭教師をしていたときには、図書室をよく利用させてもらったわ。今はデジタルデータが主流だから、ひとりで自由に閲覧できてよかったわ。まだデジタル化されていないすばらしい文献も山のようにあって。もっと活用するべきね。」

「そんなものはただの伝説だ。初代の『王の間』などというものはない！」

「それにしても随分と狼狽してるのね。私が本当に砂糖を盗むためだけに、何度もお城に忍び込んだと思ってるの？」

「何だと！」

老人は冷や汗が止まらなくなっていました。

「砂糖なんて興味ないもの。私、甘いもの嫌いなの。いい値では売れたけどね。」

「貴様、初めから『王の間』が狙いだったのか！」

「あら、やっと認めたわね。」

「はっ！いや...。」

「さてと。」

ミスズは、呆然としている皇子の首にナイフを突きつけました。

「もう言い合いは面倒だからさ、さっさと案内してちょうだいよ。」

「おや？こんな時間にどうなさいました？」

周囲を気にしながら廊下を歩いていた老人は、急に声をかけられて狼狽しました。

「こちらでございます。」

声は足元からでした。

「ぬう？アレキサンドロスではないか。このような所で何をしている。」

そこに居たのは、首だけになった元警備部長でした。足がなく、動きが取れないため、スケボーに乗っています。

「アレキサンドロス金剛でございます。首だけになっても王様をお護りしたく、自主的にパトロール中でございます。」

「そうか、それはご苦労。だが、近々新しい警備部長も決めなければいけない。君もそろそろ再就職先を探した方がよいぞ。」

「いやいやいやいや、ご冗談を。私は王様に命をお預けしておりますゆえ、そのようなことはできません。では、失礼いたします。」

酒の匂いを漂わせながら、元警備部長は去って行きました。

「またどこぞでたかってきたのだろう。お前さんにやられてから、ずっとあの様だ。」

「私のせいじゃないわよ。それにしても、声を掛けなきゃ酔って寝込んでいたのも気づかれなかったのに。おバカさんね。私たちに気づかないくらい酔っちゃって。ヤダヤダ酔っぱらいは。」  
ミスズと皇子は、側近警護官に変装していました。もちろん、皇子にはナイフが突きつけられたままでした。

元警備部長は、先の角を曲がった辺りでスケボーを止めると、何やらブツブツと呟いていました。

「伊達、聞こえるか？お前の読み通りだ。いま、G30エリア方面に向かったぞ。お前本当に頭いいなあ。」

「ジイ、初代の『王の間』とは何のことだ？そこに何かがあるというのですか、先生？」

皇子は、歩いている間に少し落ち着いてきて、次は疑問がどんどん浮かんできました。

「なぜ私を騙して...。」

皇子は危うく泣きそうになり、口をつぐみました。

沈黙したまま、3人は階段を下へ下へと降りて行きました。

「ここは昔、ゴミ集積所になっていたという部屋ではないか。今は使われていないはず。」

老人が開けようとしている扉を見て、皇子は呟きました。

老人は、皇子のこの言葉には反応せず、鍵を開けると中へと入っていきました。

部屋には、忘れられた粗大ゴミがいくつか転がっているだけで、あとは何もなくてガランとしていました。3人が入ってきた正面の入口の他に、左手に大きな出入口があります。ゴミを外へ運び出すための搬出口のようで、今はシャッターが下りています。

「さ、早くなさい。時間がないわ。」

ミスズに促され、老人は懐から尺八を取り出しました。

目を閉じて歴代の王様に赦しをこうと、大きく息を吸って尺八を吹き出しました。

尺八の音色は、部屋の中で共鳴して、やがて部屋全体が揺れだしたかと思うと、奥の床が盛り上がってきました。

しばらくすると、とうとうステージのようになり、さらに音響機器のような物まで現れました。

「このお城は、他の少数の成金が屋内の一部を砂糖で造って喜んでるのは訳が違う。ほぼ全ての建材が砂糖なのよ。ありえないでしょ？普通。雨が降っても溶けやしない。添加物を混ぜてるわけでも、プラスチックコーティングしているわけでもない純粋な上白糖で。なぜだかわかって？」

ミスズは少し首を傾げ、いたずらっぽい微笑を浮かべながら皇子に問いかけました。

確かに、ここは比較的雨の少ない地域ではありますが、もちろんそれなりには降りますし、台風がやってくることもたまにあります。それでもお城はビクともしません。

「産まれたときから砂糖のお城なので気にしたことがなかったが、冷静に考えると確かにそうだ。」

皇子は新事実には愕然としました。

「普通は冷静に考えなくてもわかるものよ。お父上がいつもレモネードを作っている、あの砂糖と同じなんだから。」

皇子は、幼い頃に王様が作ってくれたレモネードの味を思い出していました。

当時は甘すぎて嫌いだったが、今はあの懐かしいレモネードを飲みたいと思いました。

子供の頃の親子の思い出に浸っていると、ミスズの声が遮ってきました。

「300年前、この国は内戦で乱れていた。それを制したのが初代の王様・アーノルド3世よ。群雄割拠する中、生き残れたのはこのシステムのお陰。」

ミスズは続けました。

「当時はお城の建材もロクに揃わなかった。そこでアーノルド3世は、その辺にいくらでもある砂を使えないかと考えた。そこで優秀な錬金術師—今でいう科学者ね、彼らを集めて開発させたのよ。この部屋を。」

皇子は、何が何やらわからなくなってきました。

ミスズはさらに続けます。

「よく見てごらん下さい。この部屋はお城の中で唯一、砂糖ではない建材で作られているのよ。ここからは特殊な超音波が発生しているの。その超音波によって砂が強固に結束し、雨も弾く。いまの砂糖のお城も同じ原理。」

「でも、300年も前にそんな高度な技術が...」

皇子が割って入りました。

「当時の錬金術師達の智恵と技術は、現代の科学とはまったく異質のものだったの。それでももちろん何度も改良され、現在のシステムが完成したのは、80年前。先々代の王様の頃よ。」

「この部屋を破壊して、お城を解体させようというつもりか？」

老人が言いました。

「残念ながらここはかなり頑丈にできていてな、原子爆弾でも持ってこない限り無理じゃよ。」

「ふふふっ」

ミスズはおかしそうに笑いました。

「そんなことしないわよ。このお城ひとつのために放射能汚染なんてごめんだわ。これでも環境学を学んだのよ。そんな環境破壊するはずないじゃない。これを見て。」

ポーチから小さな冊子を取り出すと、老人に見せつけました。

「この部屋の取説よ。見つけ出すの大変だったわ。」老人の顔は真っ青です。

「そ、それは...。」

「そうよ。あなたの部屋の隠し戸棚から拝借したの。大事な物はたまにチェックしないとね。」

老人は信じられないという顔で、ミスズが持っている冊子を眺めていました。

しかし何かを思い出して、ふっと笑うと、

「それは、もしもの時のために古代バングラディッシュ語で書かれている。お前に読めるはずが...」

ミスズはもう一冊、冊子を取り出しました。

『日本語訳』

老人は目を見張りました。

「パパが開発した古代語自動翻訳ソフト『古代語ゴダイゴ』で簡単に読めたわ。ちなみにこのソフトのキャッチコピーは、“古代語だって人間の言葉じゃないか！”っていうのよ。優れものなんだけどね～、登録言語がマニアック過ぎて需要が少なかったから売れなかったけどね。」

代々、側近の中からただひとり選ばれ、『王の間』の取扱説明書の保管を命じられた者のみ、古代バングラディッシュ語の習得を許される。老人は王族の信頼を得ていたのと語学に堪能であったため選出されたが、それでもかなりの苦勞を要しました。それをこの二十歳そこそこの小娘に盗み出されたばかりでなく、難なく解読されてしまうとは...。最大の屈辱でした。

「さ～て、無駄話はこのくらいにして、そろそろ始めましょうか。」

ミスズは、小さなコントローラーのようなものを取り出すと、ボタンを押しました。

## 爆音

---

「おーい、交代だ。」

「おう。新しい門は立ち心地もいいぜ。」

正門では門番の交代の時間です。

「さっきは大きな地震だったな。大丈夫だったか？」

交代に来た門番が訊ねました。

「地震？知らないぞ。」

「そんなわけないだろ。俺は仮眠室で飛び起きたんだ。」

「夢じゃねーの？」

ふたりが言い合いをしていると、遠くから何やら音楽が聞こえてきました。

“君の瞳にクラクラ～きいて、殺人光線ひとつと～びいさ”

「電気醤油だなあ。」

「ん？そうだな。誰だあんな爆音でステレオつけてる奴は。」

「なんか近づいてきてるぞ。車か？」

遠くに土煙が見えました。それと一緒に爆音が近づいてきます。

門番のふたりは不吉なものを感じて、互いのにじり寄っていきました。

近づくにつれて、土煙の中に何やら見えてきました。

「自転車ああああ！」

とうとうふたりは抱き合ってしまった。

そこに現れたのは、あの電気醤油バイセコーではありませんか。車輪は水平になり、超低空飛行で向かってきます。

「おおおお！何で自転車が飛んでんだあああ！」

電気醤油バイセコーは城壁に搭載されたばかりのロケットランチャーにレーザー光線で対抗しながら、ふたりの門番を飛び越えて正門を突破。そのまま内門の上空を越えて、爆音を響かせながらお城の方角に消えていきました。

『王の間』では、老人と皇子が、コントローラーを持ったミスズと対峙していました。

「そのスイッチは何だ！」老人は、低い押し殺したような声で訊きました。冷や汗がホウを伝って床に落ちていきます。

「今にわかるわよ。ほら。」

遠くから何か音が近づいてきます。歌のようです。

だんだん近づいて来たと思うと、搬出口のシャッターが吹き飛びました。

「何だ！何が起こった！」

爆煙がおさまると、老人はやっと声が出ました。

「あれは？」

皇子が驚いた目をしてステージを指差しました。

ステージの上には、さっきまでは無かった自転車が停まっています。

「あれは金持ちオヤジからいただいた電気醤油バイセコー。ちょっと改造させてもらったけどね。『王の間』をコントロールするための鍵よ。」

ミスズがさらにコントローラーを操ると、電気醤油バイセコーから数本のコードが伸びて周辺の機器に接続されました。

「次にこの電気醤油バイセコーが起動したとき、爆音で自動再生された楽曲は、『王の間』によってさらに増幅され、お城を取り巻く超音波をかき消してしまうのよ。」

「なんだと...。」

「わかるわよね。このお城がただの砂糖の塊に戻るってことよ。おとぎ話はおしまいなの。」  
そう言うと、ミスズはコントローラーを高々と掲げました。

「やめろーっ！！！」

コントローラーを奪おうと飛びかかってきた老人を軽くかわすと、ミスズはスイッチを押しました。

“あのご早口炸裂チェーンソー妄想ロックスタートリック♪”

電気醤油バイセコーは、電気醤油の《ウォータージェットサリー》を爆音で再生し始めました。それは『王の間』の機能によって増幅され、お城全体に響き渡りました。

「なななな、なんだまた地震か？なんだ、この騒音は！」

自室でレモネードとマカロンを楽しんでいた王様は、あまりの爆音に耳を塞いでクッションの下に潜り込んでしまいました。

それでも爆音は頭に直接響いてきます。

「痛い痛い！頭が痛い！なんなんだーっ！」

王妃様も皇女も侍女達も、お城にいた全員が頭を抱えて右往左往。お城中が大パニックです。

数分後、爆音はピタッと止まりました。曲が終わったようです。

「なんだったんだ、今のは。」

王様は、まだ頭がジンジンしていました。

ふっと床を見ると、レモネードが全部こぼれています。

「あーっ！床の砂糖が溶ける〜！」

王様は慌てた様子でジタバタ暴れていましたが、突然笑いだしました。

「はははははっ！なんてね〜。この城の建材は溶けないようになってるんだよね〜。」

ひとり芝居をして面白がっていた王様でしたが、もう一度床を見てビックリしました。

「て...、あーっ！やっぱり溶けてる～！何でだ？今まで大丈夫だったのに、何でだ？」

『王の間』では、爆音で《ウォータージェットサリー》が再生されていましたが、耳を覆うほどではありませんでした。

『王の間』はいわばコントロール室なので、影響を受けないようにできているのです。

曲が終わりました。

身動きできずにステージ上の自転車を凝視していた老人は、はっと我に帰りました。

皇子は呆然としたままです。

「特に変化はないじゃないか。」

老人は内心ドキドキしていましたが、悟られないように強気に言いました。

「すでに砂糖の結晶は切れてるわ。このお城は、もはやただの砂糖の塊よ。強い衝撃や水に弱い。そうね、雨なんか降ると一発ね。午後の天気予報は雨。それに合わせて、蟻軍団が総攻撃をかける予定よ。」

ミスズの言葉に老人は震えが止まらなくなりました。

「ち、父上...。」

皇子が、やはり震えながら呟きました。

「父上...、母上...、妹よ...。助けなければ。」

皇子は震えて言うことをきかない足を引きずるようにして、入ってきた扉へと向かって行きました。

「おっと、そうはさせないわ。」

ミスズはナイフを取り出すと、皇子に狙いを定めました。

「待てい！」

大きな声が部屋中に響きました。

驚いたミスズは狙いをはずして、ナイフは扉へ突き刺さりました。

その扉がすーっと開くと、伊達が困った顔で立っていました。

「警備部参謀長官の伊達君ね。遅かったじゃない。それに、威勢のいい声のわりには情けない顔ね。」

ミスズは見下したように言いました。

すると、

「どこ見てんだ、アリンコ野郎め！俺はここだ！」

伊達の足元から怒声が聞こえました。そこに居たのは、

「アレキサンドロス金剛、お城の危機に参上！！！」

スケボーに乗った元警備部長です。

伊達は元警備部長に悟られないように軽くため息をついたが、すぐに気を取り直して言いました。

「アレキサンドロス金剛様、あなた様のお手を煩わせる程の相手ではございません。あちらに指揮官席をご用意致しましたので、どうぞご覧なさってください。」

伊達が示した方を見ると、元警備部長行きつけのスナックのママが、ソファーに座ってニッコリと微笑んでいました。

「あっ！ママ！何でここに？」

と驚いたのもつかの間「いや～いつ見てもキレイだな～。俺のために来てくれるなんて。そうだな、危なくなったら呼べよ。主役は最後に登場する方がカッコいいからな。ママ～！最近行けなくてごめんね～」

元警備部長は、スケボーを勢いよく滑らせると、ママの待つ「指揮官席」へと飛んで行きました。

。

「邪魔者は消えたわね、伊達参謀長官。」

ミスズが不敵な笑みを浮かべました。

「邪魔者とは無礼な。危険だから避難していただいたまでのこと。」

伊達もメガネに手を添え、薄笑いを浮かべていました。

実は、たまたま元警備部長のツケを取り立てに来ていたママに、協力してもらったのでした。もちろん危険手当付きで。

「さあどうする気かしら？お城はもうすでにただの砂糖の塊なのよ。雨があたらないように屋根でも作ったらどう？」

ミスズが勝ち誇った声で言いましたが、伊達はそれには応えず話し出しました。

「君の作戦はだいたい想像がついてたよ。僕は10年前に同じことをしようとしたことがあってね。」

「そうだったわね、天才ハッカーの伊達奈緒人君。あなたのことは調べがついてるわ。アレキサンドロスのような男の下に付く器でないことも。なぜそうしなかったの？」

ミスズは興味深そうに訊きました。

「わざわざ話すほどのことじゃないよ。気が変わっただけさ。」

伊達は素っ気なく言うと、ディスクを一枚取り出しました。

「君とムダ話をしている暇はないんでね。」

余裕の笑みを浮かべていたミスズが、警戒の目になりました。

「それは？」

「おとぎ話の始まりの曲さ。『王の間』の機能を使って、お城の砂糖を再び結束させる。」

伊達は左手をゆっくりと肩の辺りまで挙げると、パチンッと指を鳴らしました。

「突撃！！！」

後ろに控えていた警備部員が一斉に『王の間』になだれ込んで行きました。

「舞台を確保しろ！」

指示を受け、部員達は舞台に向かって突進して行きました。

ところが、途中で小競り合いが始まり隊列が乱れてしまいました。

「何をしている！」

伊達が焦って叫びました。

「あはははっ、伊達参謀長官殿どうなさいました？」

ミスズはさも可笑しそうに言うと、さらに続けました。

「私がたったひとりでこんなところに来ると思ってるの？」

警備部員の中に蟻の一味が紛れ込んでいたのです。

『王の間』をめぐる、警備部員と蟻の大乱闘が始まりました。

伊達は蟻の動きを分析して、的確な指示を出そうと努めましたが、変幻自在な蟻どもに惑わされてうまくいきません。

ミスズも俊敏な動きで警備部員を翻弄し、徐々に伊達に近づいてきました。そしてとうとう、目の前に現れたミスズに伊達は首を捕えられてしまいました。

衝撃で伊達のメガネが床に落ちました。

「よく見たら結構かわいいじゃない。別の場所で見逢ってたら、一晩くらい遊んであげたのにね。」

ミスズはナイフを逆手に持ちかえると、伊達めがけて振り下ろしました。

その瞬間、何かナイフを弾き飛ばし、ミスズは右手を押さえて後ずさりしました。

伊達は喉を抑えられていた手が急になくなり、その場に座って咳き込んでしまいましたが、ハッとして上を見上げました。そこにいたのは、

「アレキサンドロス金剛、再び参上！」

手足が付いて元の体に戻った元警備部長が、アレキサンドロス家の家宝“EX狩場”を持って立っていました。

「ふははは～！驚いたか～！」

その場にいた全員の動きが止まり、目を丸くして元警備部長に注目しました。

「スナック真由美のママは裁縫が得意でな。わたしの体も縫い合わせてくれるように頼んでおいたのだ！なあママ。」

先ほど「指揮官席」に座っていた真由美ママは、裁縫道具をしまうと、にっこり笑いました。

「アレさん、ツケを3倍にして払ってくれる話、忘れんといってくださいね。そんじゃまた。」

ペコッと頭を下げると、そそくさと帰っていきました。

「ママ～、愛してるよ～♪」

真由美ママの艶っぽい背中に向けて熱い投げキスを贈ると、元警備部長は舞台の方へ向き直りました。

「さあて、一気に行かせてもらうぞ。伊達！俺の後ろに付いてこい！おおおりややあ～！」

ミスズは我に返ると元警備部長の前に立ちはだかりましたが間に合わず、払い除けられてしまいました。

真由美ママが中庭を通過して正門を出ると、顔に冷たいものが当たりました。

「あら、雨。夜からって言ったのに早まったのね。傘を持ってきてよかったですわ。」

バッグから折り畳み傘を取り出すと、開店準備のためにお店へと急ぎました。

「城壁が溶けてるぞ～！」

「雨だ！雨をなんとかしろ！」

「傘持ってこい！」

「傘で間に合うかバカ者！」

遠くからそんな声が聞こえてきましたが、誰も気付く者はいませんでした。

いや、ひとりだけ、『王の間』の入口付近に飛ばされたミスズだけはその声を聞いてほくそ笑ん

でした。

## 再結束

---

『王の間』では、元警備部長の猪突猛進が続いていました。

蟻一味は斬られ、仲間の警備部員も弾き飛ばされ、とうとう舞台近くまでたどり着きました。そして最後は伊達の襟元を掴むと、舞台に投げ込んでしまいました。

「伊達！」

「は、はい！」

伊達は電気醤油バイセコーにパソコンを接続すると、新たなディスクを挿入し、インストールを始めました。

「アレキサンドロス金剛様、やはり貴方は私の見込んだ素晴らしい方だ。」

伊達は、大立回りを続ける元警備部長に向かって呟きました。

しばらくすると電気醤油バイセコーが起動し、音楽が流れ始めました。

「なんだかゆる〜い曲だなあ。いいのか？こんなんです。」

元警備部長は舞台の伊達を護りながら訊きました。

「はい、実は作者の意向で電気醤油の楽曲しか使用できないという制約がありまして。検証した結果、この曲しかなかったのです。」

「そうか、それじゃしょうがないなあ。」

「まあ、少し時間はかかりますが、問題ありません。」

伊達はそう応えながら、何か様子がおかしいことに気づきました。

ミスズの姿が見えない。

「しまった！」

ミスズは王様の部屋の前にいました。

「さすが伊達君ね。もう溶解が治まったわ。想定より3分も早かったわね。」

そう言うと、ふふっと笑って扉を開けました。

中には王様の姿はありませんでした。蟻が侵入して、『王の間』で戦闘が始まったとの報せを受けて、避難した後でした。

「こんなに大騒ぎしてるんだから居なくて当然よね。」

ミスズは王様の部屋の中を見回しました。

「それにしても、あい変わらず趣味の悪い部屋ね〜。私なら純和風の造りにするのにな。」

すると、後ろからキザな声が聞こえました。

「ミスズお嬢様って、和風建築がお好きなんですね。」

振り返ると、元門番の阿部こーじが、壁に寄りかかりちょっとカッコつけて立っていました。

「そういうの似合わないわね。あい変わらず。」

ミスズは呆れたように言いましたが、元門番はまったく気にせず、やはりキザな口調で続けました。

「伊達参謀長官の命を受け、コソドロ蟻の駆除にやってきた阿部こーじだ。よろしく。」

「とっくに知ってるし。何のドラマの影響？」

やはりそれにも応えず、得意気に続けます。

「俺が来たからにはもう逃げられねえぜアリンコ野郎。覚悟しな...って、あれ？ミスズお嬢様？」

ミスズの姿は部屋から消えていました。

窓が開け放たれ、テラスを伝って去っていくミスズの後ろ姿が見えました。

「ちょっと、何で行っちゃうんですか！」

「あんた長すぎんよ。それにわたし無視してしゃべり倒してんのはあんたでしょ。」

『王の間』の蟻軍団は、元警備部長によってお城の外に追いやられ、戦いの舞台は中庭に移っていました。しかしそこには蟻の援軍が到着しており、警備部員達は苦戦を強いられています。

「まずい、このままではお城に押し戻されてしまう。」

元警備部長もあまりの蟻軍団の多さに疲れが見え始めました。

「お手伝いしましょうか？」

突然耳元で囁かれ、元警備部長は身震いしました。慌てて振り返ると、お掃除隊のおじいさんの顔が目の前にありました。

「ぎょぎょえ～！おっさん顔近すぎだよ！」

「久しぶりに会ったのにご挨拶だな。」

「先週会ったばかりだろ。」

「ほー、覚えとったか。頭だけで酔っぱらってゴミ棄て場にいたもんだから、もう少しで生ゴミに分別するところじゃった。」

「何がもう少しでだ！分別されてたのをマツとタイゾウが見つけて助けてくれたんじゃねえか。」

元警備部長は、その時のことを思い出してはらわたが煮えくり返る思いでした。

「そうだったかの？最近物忘れが激しくてな。」

「てめ～！」

元警備部長は捕まえていた敵の頭を拳でグリグリしながら唸りました。

「手伝わんでいいなら任せるぞ。わしらの仕事は後片付けじゃからな。」

おじいさんが立ち去ろうとすると、首元をグイッと掴まれました。

「まあおっさん、どうせヒマなんだから？後片付けのウォーミングアップにちょっと体動かしてけよ。」

元警備部長は頬をヒクヒクさせながらも、せっかくの援軍を逃してはいけないと手に力を込めました。

「素直じゃないのお。まあいい、軽く準備体操しとくか。」

言うが早いか、元警備部長の手に上着だけ残してすでに蟻軍団を蹴散らしていました。

「マツ！タイゾウ！」

おじいさんが叫ぶと、すでに控えていた部下ふたりが掃除道具を持って現れました。

長箒は分断して三節棍に、ハタキは柄の部分を抜き取ってフェンシングのような剣に、雑巾は四隅に鋭利な刃物がついたブーメランにそれぞれ変形しました。

3人は、俊敏な動きに加えてそれらの武器も駆使して次々と敵を倒していきましたが、それでも蟻の数には勝てずにジリジリとお城側に押されていきました。

## 理由(わけ)

---

元門番は、ミスズと対峙していました。

元門番の後ろには、王様を始めとした王族と側近数名、そして警備部の特別護衛班がいます。ミスズが彼らに追いつく直前に元門番が立ち塞がったのでした。

「王様、お逃げください。ミスズお嬢様、これ以上は行かせません。」

「随分と生意気になったわねRB-CO2。」

ミスズは例のリモコンを取り出して元門番に向けました。

「今度は永遠に眠らせてあげる。」

元門番は固唾を飲んで身構えました。

ミスズの親指が「シャットダウン」ボタンを押すと、元門番の動きは止まり、ゴロンとその場に転がってしまいました。

「終わったらスクラップにしてあげるから、そこで大人しく待ってなさい。」

ミスズは倒れている元門番の横を抜けると、王様に近づきました。

側近達は王様を促して逃げようとしたのですが、王様は動きませんでした。

「悪党を相手にすごすごと逃げたとあつては、国民に示しがつかん。ワシ自ら成敗してくれるわ。」

王様は剣を抜きました。

見ていた王妃はうっとりとして、隣の皇女に言いました。

「王様ステキ！王様はね、若い頃にはオリンピック代表候補になったほどの剣の達人なのよ。皇太子という地位のため、出場はできなかったけれど、出ていたら金メダル間違いなしと言われていたの。凛々しいわ～王様。」

「ふふふ、ワシを怒らせたことを後悔するがよい。エヤーッ！」

カキーン！

王様の剣は簡単に弾き飛ばされました。

「ふ...ふん。貴様やるな。ワシも油断しすぎた。おい、剣をよこせ。今度は本気でいくぞ。トリヤーッ！」

警備部員から剣を受けると、再びミスズに挑みました。

カキーン！

「つ...つぎ！」

カキーン！

「も、もう一丁！」

カキーン！

「はあはあはあはあ...。」

王様の剣はすべて弾き飛ばされました。

「どうなさいました？もうお仕舞いですか。お・う・さ・ま。」

ミスズの手にはナイフ一本です。

「なんのまだまだ！次だ！」

「王様...もう剣がありません。」

警護班長がミスズを見たまま言いました。全身汗だくで震えています。

「皇太子時代には周りの方々が大変気を遣われたそうですね。例えば試合でわざと負けたり...ね？」

王様は顔を真っ赤にして怒っていましたが、ミスズは気にも留めずに近づいてくると、王様の横をすり抜けて行きました。

「さあて皇女、一緒に来ていただきましょうか。」

「え？わたくし？」

その場にいた全員が皇女を見ました。王様を倒しに来たのではないのか？

「私は皇女に用があるの。さあ。」

ミスズが皇女の肩を掴もうと手を伸ばしました。

「はっ！」

瞬間、ミスズは宙に舞い、元門番のスライディングをかわしました。

「ちっ！はずしたか。」

ミスズは着地すると、そのままサッと後退して身構えました。

「なぜだ！」

元門番は皇女を守るように両手を広げて立ち上がりました。

「伊達さんがプログラムを一部変更してくれましてね。そのとき自爆装置も外してくれました。まさかあんなものまで付いてるとは思いませんでしたよ。」

「わたしを油断させるために眠ったフリをしたわけね。」

「そうですよ。それに主役は後から登場した方がカッコいいでしょ？」

「どこかできいたような台詞ね。」

ミスズは少しあきれて言いました。

「それにしても狙いは皇女様だったんですね。」

元門番は皇女を王妃に渡しながら言いました。

「そうよ！その女は私の婚約者を奪ったの！」

「な、なんですって！」

驚いたのは皇女です。

評判の美しさにも関わらず、王族という立場から彼氏いない歴18年なのです。

「だってさっきは王様の部屋にいたじゃないですか？王様を襲うためじゃ...。」元門番も素朴な疑問を投げ掛けました。

「ああ、あの部屋に行ったのは、これを探すためよ。」

ミスズはポケットから音符型のブローチを取り出しました。

「前に忍び込んだときに落としちゃって。」

「それだけ〜？」

「それだけって言うな！彼からもらった大切なブローチなのよ。」

ミスズはイラついてきました。

「とにかく、皇女を渡してちょうだい。」

## 皇女の秘密

---

恋い焦がれた男性は星の数ほどいるが、付き合ったことなどないし、ましてや人から奪い取るなどもっての他。

「わたくし、そんなことしていませんわ！」

皇女は顔を真っ赤にして言いました。

「そうだ、ワシの娘がそんなことをするはずがない！」

「そうですよ！そうですよ！」

王様も王妃もミスズに抗議しました。

「黙れ〜っ！」

ミスズのひと声に圧倒されて、一同大人しくなっていました。

「彼とは大学に入学して間もなく付き合いだしたの。自分で言うのも何だけど、とってもラブラブだったわ。よくふたりで講義をサボってデートしたものよ。親に嘘ついて彼の部屋にお泊まりしたことも何度もあるわ。将来は結婚しようって話していたの。」

ミスズは時に頬をピンク色に染めながら、その彼とののろけ話を勝手に話し続けました。

と思ったら、しばらくして、その口調が突然変わりました。

「そんなある日、ふたりでテレビを観ていたら、王族一家がニュースで取り上げられていたの。その時初めて皇女を見たわ。それはそれは美しくて、私は見とれてしまった。でも私の横で、さらに魅了されていたのが彼よ。数日後彼から、皇女を好きになってしまったからもう私とは付き合えないと、別れを告げられたの。」

「そんなバカなことって...。」

話を聴いていた一同は、何だか悲しくなってきました。

「私もそう言ったわよ！あの人は王族で、庶民がお付き合いできる人じゃないのよって。でも彼は皇女が好きだってきかないの！」

ミスズは泣き出してしまいました。

「私は仕方なく身を引いたわ。」

「な、なんで？」

と一同。

「だってもう彼の心は私から離れていたんだもの！しょうがないじゃない！結婚まで考えていたのに〜！」

もう号泣です。

側近や警護班の中にも、聴いていて涙する者まで現れました。

「ある日彼の友達から、彼が知り合いのツテで皇女と会うことに成功し、非公式に交際しているってきいたの。」

「お、お前、そんな男がいたのか！」

王様は険しい顔で皇女を問い詰めました。

「そんな、お父様まで！」

いつの間にか悪役になってしまった皇女は、目をウルウルさせています。

「私は彼のことが本当に好きだったから、彼がそれで幸せになれるならと無理矢理自分を納得させたの。でもかなりの時間を要したわ。」

「うんうん。」

「でもその3ヶ月後、同じ彼の友達から聞いた話に私は衝撃を受けたわ。」

「どうしたの？」

みんな続きが聞きたくてウズウズしています。

「彼に飽きた皇女が、彼を捨てたっていうの〜！」

ミスズはまた大きく泣きました。

「なに〜！！！」

皇女はもうすっかりその場の全員を敵に回してしまい、泣き出してしまいました。

「その彼は今どうしているの？謝らなくては。」

王妃が訊ねました。

「行方不明なんです...。」

「なんと...。」

一同絶句であります。

「私から大切な彼を奪っておいて、簡単に捨てるだなんて赦せない！彼のためにも皇女に復讐してやるって誓ったの。」

「そうだよねー。赦せないよねー。」

王様も泣いています。

「皇女をいただいて行くわよ。」

「どうぞ、どうぞ。」

「えっ、やだ！お父様！お母様！みんな〜！」

皇女はミスズによって連れ去られてしまいました。

こちらはお城の外。

警備部員と蟻の攻防戦が続いています。

「このままでは多勢に無勢。押しきられてしまう！」

さすがの元警備部長にも焦りの色が出てきました。

そこへ...

「うおおおおっ！」

空から何かが突っ込んで来るのが見えました。

「あれはミサイル？万事休すか...。」

元警備部長は思わず目をつむりました。

どーーーーん！

その物体は、蟻軍団のど真ん中に落ちました。

お城の中では、スズの話聞いてみんなまだ泣いています。

「あの〜。」

少し離れたところで呆気にとられていた元門番が、恐る恐る王様に話しかけました。

「いいんですか？本当に連れて行かれちゃいましたよ。かなりヤバくないですか？」  
オイオイと泣いていた王様は「はっ」と我に返りました。

「あの女め、同情を誘ってワシの注意を反らすとは策士だな！皆の者、皇女を奪い返せ！」  
元門番を先頭に特別警護班が皇女奪還のため、ミスズの後を追いました。

「それにしても」

残った王様はポツリと言いました。

「まだまだ子供だと思っていた皇女が、男を手玉に取るようなことをしているとは...。」

「ホントですね。」

王妃もしみじみとしています。

「ワシに似たのかな？」

「え？王様、どういうことですか？」

「ジョーダン！ジョーダン！わはははははははっ！」

蟻軍団の10人くらいが落下物の犠牲になったようです。

徐々に土煙が収まってきました。蟻軍団と警備部員達の見守る中、現れたのは。

「あなたは、怪貝殿！」

元警備部長は驚きの声を上げました。

そこにいたのは、昨日、元門番が正門を壊した際に爆風で飛ばされた怪貝さんでした。今日はいつもの白シャツ、蝶ネクタイでキメています。

「いやー、アレキサンドロス君じゃないか。久しぶりだねー。体がくっついたようでよかったねー。」

怪貝さんは、いつもの柔和な顔で元警備部長に近づいてきました。

「怪貝殿、お久しぶりです。アレキサンドロス金剛でございます。どうしてここへ？それにいま、空から...。」

「飛んで来たんだよ。」

「いやあの、ですから、どうやって飛んでいらっしやったのかと。」

「あのね...」

怪貝さんが話し始めようとする、お城の中から大声と共に人が数人出てきました。

先頭に出てきたのはミスズです。小脇に皇女を抱えています。

「までー！」

次に元門番が、さらに後ろに特別警護班が続きます。

「あ！門番の阿部こーじく〜ん！」

怪貝さんが嬉しそうに手を振りました。

「あれ？怪貝さん、なんでこんなところに？」

元門番がビックリして急に立ち止まってしまったものだから、後ろから来た特別警護班の連中は止まることができずに、元門番を避けるのが精一杯。みんな横の池へと落ちていきました。それをチラミしながら、でも全く気にもせずに怪貝さんは話し出しました。

「親友の王様の危機だからね、僕も微力ながら加勢しようと思って。」

横から元警備部長が割り込んできました。

「危険です！一般人の、しかも王様の親友にこんな危険な所に居ていただくわけにはまいりません。」

「そうですよ。怪我するだけですって。帰った方がいいですよ。」

元門番も怪貝さんを心配して、なんとか帰らせようとしてました。

「大丈夫だよ。僕もバージョンアップしてきたから。」

「バージョンアップ？」

元警備部長と元門番は声を合わせて言いました。

「ほら、門番の阿部こーじくんが巨大化したじゃない。あれを見てやっぱりアンドロイドってすごいなーって思って、思いきって脳以外全部を機械にしてもらって改造人間になったのさ。」

「改造人間!!」

聞いていたふたりはあまりに驚いたので、お互いをビンタして、夢ではないことを確認しあいました。

「いや...あの、怪貝殿、では空を飛んできたのは...。」

「だからあ、飛んできたんだって。説明が面倒だから見ててよ。」

怪貝さんは蟻軍団の方に向き直ると、「変身！」とひと声。

すると皮膚が関節を境に盛り上がるように分断され、裏返るとオリハルコンの体が現れました。目の辺りもゴーグルのように変形。

そしてヘルメットを取り出し頭に被ると、コンピュータの起動音のようなものが聞こえ、ゴーグルが赤く光りました。

「おお〜！」

周りの人達が驚きの声をあげている中、怪貝さんは「ふんっ」と気合いを入れると、背中に折り畳まれていた翼を開き、空へと舞い上がりました。そのまま蟻軍団の中へ突進すると、次々と敵を打ち倒していきました。

「すごいよ怪貝さん！人間技じゃないよ！」

ひと回りして戻ってきた怪貝さんに元門番が駆け寄って行きました。

「だから〜、改造人間なんだって。そうそう、思い出したんだけどね、僕を改造してくれたのは門番の阿部こーじくん、君のお父さんの魔鍋博士なんだよ。」

「え？ええええ！」

元門番はまたまたビックリです。

「あの雑居ビルでお嬢ちゃんに会ったとき、どこかで見たことあるな～って思ってたんだよ。魔鍋博士は、君とお嬢ちゃんのことを心配されててね。実はお嬢ちゃんに伝言を頼まれているんだ。」

「伝言を？」

「君たちにも話しておこう。実はね…」

## 少年時代

---

「皇女様が拐われたって？どうしてだ？奴の狙いは王様の権威の失墜ではないのか！阿部くん、どういうことだ！」

『王の間』での作業を終えた伊達は、報告を聞いて急いで中庭に出てきたのでした。

「あっ、伊達参謀長官。実はかくかくしかじかでして。」

元門番は、ミスズの目的が最初から皇女にあったことを身振り手振りでこと細かに説明しました。

「なんだって...皇女様がそんなことをするなんて信じられない。」

「ああ、そのことなんですが...」

「いかん！こんなことをしている間にも、皇女様がどんな目にあわされているかも知れない。疑惑はどうあれ、先ずはお助けしなければ。」

伊達は元門番を遮ると、ノートパソコンを抱えたまま敵陣へと駆け出して行きました。

「あっ、伊達さん！参ったな〜。」

「伊達！お城は大丈夫か！」

戦いの中へ無防備に走り込んできた伊達を助けながら、元警備部長が訊きました。

「はい、もう大丈夫です。あと数回ほど曲を繰り返せば、大方の修復も完了します。その後はお掃除隊をお願いします。」

「それにしてもすごいな、お前。」

「アレキサンドロス金剛様こそ、素晴らしい戦いっぷりです。わたしは...わたしはむかし自分がやろうとしたことを止めたまでのこと。」

最後は小さな声になっていました。

「え？なんて？まあいいや。まったく武器も持たずに戦場に出てくるとはあきれた奴だ。ここじゃパソコンは役に立たんぞ。はははははっ！」

元警備部長は生き生きとしていました。平和なお城で警備訓練をしているより、やはり戦いの中にいる方が性に合っているようです。

「皇女様は正門の楼閣の上だ！伊達、行ってこい！」

元警備部長は、敵から奪った剣を伊達に渡すと、ニヤッと笑いました。

「僕が連れてってあげるよ。」

突然怪貝さんが現れると、伊達を後ろから抱きかかえ、空へと飛び上がりました。

「空だ、撃て〜！」

蟻の中から声が上がりました。

「そうはさせないもんね。」

言うが早いか、怪貝さんの脇腹辺りがガクンととび出たかと思うと、ミサイルが次々と発射されました。

「怪貝様...すごいですね。」

「さあ、皇女様の元へ急ぐよ！」

怪貝さんはさらにスピードを上げ、楼閣を目指して飛んで行きました。

「か、怪貝殿...ちょっとやり過ぎでは...。」

地上では、元警備部長を始め、警備部員達もミサイルの巻き添えをくっていました。

★★★

「奈緒人。いつまでパソコンで遊んでるの！お昼食べちゃってよ。お母さん出掛けなきゃいけないんだから！」

「いま、いいとこなんだよ。自分で片付けるから、早く出掛けなよ。」

夏休みも終盤に差し掛かり、少年は焦っていました。

友達と賭けをしていたのです。

お城のコンピュータのセキュリティは、世界最高水準。その鉄壁のセキュリティを破り、夏休み中にハッキングする。

成功したら、大好きなお好み焼き屋で奢ってもらう約束をしていました。

なんてバカらしい約束だと思えますが、彼は本気でした。それだけの自信があったのです。

ところが始めてみるとなかなかうまくいかない。だんだん、賭けなどどうでもよくなり、巷で“天才ハッカー”と呼ばれる自分への意地になっていました。

今日はいくつものセキュリティをクリアし、もう一歩というところまで来ていました。

「よし！やったぞ！侵入成功だ。」

ディスプレイには、城内監視カメラの画像が映し出されました。

「何だ、この部屋？」

初めて見た城内の映像を楽しんでいましたが、変わった部屋を見つけました。

何も無いガラとした部屋なのに、何故か何台もの監視カメラが設置されています。しかも、そのモニターは警備室ではなく、ひとりの偉そうな老人の部屋へつながっているのです。

少年は気になって内部資料を検索しました。

「これはスゴいぞ！砂糖のお城にはこんな秘密があったのか。...ということは、この超音波を止めるとお城はバラバラに解体されちゃうのかな？」

少年はクスッと笑いました。イタズラ心が湧いてきたのです。

「おもしろいな。やってみよう。」

プログラムを次々と書き替えていきました。

超音波の代わりに、最近流行りの音楽ユニット『ラブパンダコネクション』の曲を設定しました。曲が流れる中、城壁が崩壊していくというわけです。

「あっ、しまった。」

もうプログラムを起動させるだけとなったとき、キーを間違えて監視カメラ画面に戻ってしまい

ました。

画面には、可愛らしい部屋が映し出されています。

「まずいな、そろそろ気づかれるかもしれない。プログラムは出来上がってるから、急いであそこまで戻って...」

すぐにやり直そうとしましたが、画面に映った映像を見て、そのまま動けなくなってしまいました。

どのくらいそうしていたでしょう。やっと声が出ました。

「誰？」

そこには可愛らしい女の子が映っていました。

彼女は、侍女らしき数人の女性とお人形遊びをしていましたが、何だか寂しそうに見えました。

少年は、急に胸の奥が苦しく感じてきて、初めての感覚に動揺してしまいました。

突然、警告ランプが点灯しました。お城側がハッキングに気づいて、侵入者の身元を割り出そうと捜索を始めたようです。

少年はもうしばらくその女の子を見ていたかったのですが、時間がありません。先ほどのプログラムを表示させると、エンターキーに指をかけました。

「...」

このままでは身元がばれてしまう。プログラムを起動してお城を解体させてしまうか、もしくはシールドを張るか早く選択しなければなりません。解体プログラムはできているので、エンターキーにかかっている指をちょっと動かすだけで事は済んでしまいます。なのに少年はまだ迷っていました。監視画面で見た少女の寂しそうな顔が頭から離れないのでした。

「ええい！」

少年はプログラムを削除すると、新たにシールドプログラムを作成し始めました。

玄関の開く音がしました。

「ただいま～。奈緒人、いるの？食べてないじゃないの、まったく。何やってるの！」

帰宅した母親の声で我に返ったとき、もう外は暗くなってきていました。

「ごめーん。寝ちゃったよ。」

点けっぱなしだったパソコンの電源を落とすと、しばらく目を閉じ、少年は階下へと降りていきました。

それから数日後のことでした、お城から出頭命令がきたのは。

楼閣では、皇女がなんともいやらしい格好で縛られていました。

「あの...どうしてこんな縛り方...。」

「私、官能小説家の鬼団ハマニアなの。美しいでしょ？あなたにはもったいない最上の技よ。いま練習中なのこれ。難しいんだからね！」

ミスズは縛り上げた皇女の周りをゆっくりと歩きながら考え込んでいます。

「やっぱり、なんか...ちょっと違うのよね～。ここかしら？」

手直しを始めました。

「え？あっ、ヤダそんなとこ。あっ...。」

「ちょっとじっとしててよ。これをもう少しずらしてみても...。」

「あっ、そんなとこ...。ダ...メ...」

「うるさいわね。こうなってないとできないでしょ！」

ふたりのやり取りに、入口で見張りをしている蟻達もそわそわしています。

国民的美少女である皇女の恥ずかしがる声を間近に聞いて、冷静でいられるはずがありません。さっきから気になって気になって仕方がないのです。

「お、おい...」

「うん...」

ソッと覗こうとしたそのとき。

ボゴッ！

後ろから頭を殴られて、皆倒れてしまいました。

「ああっ、もう止めて！おかしくなっちゃう！」

「これで完成なんだから、我慢しなさいよ！あれ？やっぱり違う。DVD見直さなきゃ。ん？」  
ミスズがDVDプレーヤーをチェックするために後ろを向くと、伊達が真っ赤な顔で立っていました。

「あら、早かったわね。」

ミスズにそう言われて我に返った伊達は、慌てて

「そ、そこまでだ！蟻の首領。」

「いつからいたの？」

「え？」

「だからあ、いつから皇女の恥ずかしい格好を盗み見ていたのかって訊いてるのよ。」

伊達はまた顔が真っ赤になりました。

「なななな、何を！いま着いたばかりだ！」

「ふ～ん、まあいいけどね。」

そのとき伊達の後ろから大きな声が聞こえました。

「伊達くんお待たせ～。」

怪貝さんです。

「遅くなってごめんね。外の奴ら意外と手強くて、一緒に突撃しようって言ってたのに3分も遅れちゃって。」

「か、怪貝様、そんな作戦を大声で言わないでください！」

伊達はさらに大声で返しました。かなり慌てているようです。

「はは～ん。要するに3分くらいじっと見てたのね～。クススッ。」

ミスズはおかしそうに笑いました。

「皇女はこの地位と美貌を使って、あなたみたいな男を取っ替え引っ替えしてたのよ。」

「皇女様はそんな方ではない！何かの間違いだ！」

「黙れ！」

「そっちこそ黙れ！」

ふたりはにらみ合い、その場には緊迫した空気が漂いました。

「あの～」

伊達の後ろでふたりの会話に入れず困っていた怪貝さんが、遠慮がちに声をかけてきました。

「ミスズさんだっけ？お嬢ちゃんに少し話があるんだけど。」

「え、何よあんた。ああ、RB-CO2と一緒にいた自転車のオヤジじゃない。」

「どうも、怪貝といいます。お父上の魔鍋博士には大変お世話になってます。ほらっ。」

怪貝さんは首の後ろにある魔鍋博士の刻印を見せました。

「あらホント。父が完成品につける銘だわ。ていうことは、あんたアンドロイド？」

「いえいえ、元々は人間ですが脳だけ残して改造人間にしてもらったんだ～。」

怪貝さんは嬉しそうに応えました。

「へ～、珍しい。それで話して何よ。取り込み中だから手短かにしてよね。」

それを聞いて怪貝さんは伊達の横まで歩いてきました。

「実は昨日から今朝にかけて超特急で改造してもらったんだけど、その間に博士がいろいろ話をしてくれてね。門番の阿部こーじくんのこともだけど、お嬢ちゃんのことをとても心配しててね。」

「ふん、それで？」

「お嬢ちゃんが彼に振られて家を飛び出した後、博士は隣街でたまたま彼を見掛けたそうだよ。」

「え？まさか！彼は行方不明だって田中くんが言ってたのに！」

ミスズは驚いて怪貝さんの近くまで走ってきました。

「田中くんって彼のお友達ですよ。その人も一緒だったみたいだよ。」

「そそそそそそれで？」

ミスズは怪貝さんに掴みかからんばかりの勢いで迫りました。

「ふたりともかわいい女の子を連れていたみたいだよ。博士はお嬢ちゃんに知らせなきゃと思って探してたんだって。」

「...」

「...」

「...。」

「騙されたんだな。」

ミスズの後ろから伊達の冷静な声が聞こえました。

ふたりが話している隙をついて皇女の元へ行き、縄をほどいていたのです。

「そんな！まーくんはそんなことしない！」

「まーくん？」

伊達と皇女は驚いて聞き返しました。

「彼の名前はマコトくんというらしいよ。」

怪貝さんが解説しました。

「よかった。やはり皇女様はそんな方ではなかった。私は信じていました。」

「ありがとう、伊達...さん。」

皇女の頬が赤く染まっていました。

「そ、そんな、伊達さんだなんて。いつも通り伊達と呼んでください。」

伊達も顔を真っ赤にして皇女を見つめています。

「キューッ！」

すごい叫び声と共に、何か光る物が飛んできました。伊達は皇女を抱いたまま横へ跳びましたが、一瞬間に合わず左足首から流血してしまいました。

見るとミスズの右腕が剣のように変形しています。

「まーくんはとっても優しいの。まーくんはそんなことしない。まーくんを侮辱するなんて赦せない！」

ミスズが右腕を振り降ろすと、三日月状の光が現れて伊達と皇女目掛けて飛んできました。足を負傷した伊達は、避けるのが精一杯。気づくと目の前にミスズが立っていました。

「終わりだね。皇女様！」ミスズが腕を振り降ろす。

伊達も皇女も目を閉じて身を固くしました。

ガインッ！

「何だおまえ！」

衝撃音に続いて、ミスズの驚いた声が聞こえました。伊達が目を開けると、真っ赤な足が見えました。

「僕を忘れちゃ困るよ。」

「その声は怪貝様！」

伊達が顔を上げると、見知らぬ真紅の戦士がミスズと剣を交わしていました。その姿は忍者のようにも見えます。

「ごめんね遅くなって。お嬢ちゃんの戦闘能力値が跳ね上がったから、僕もクライマックスモー

ドになったんだけど、初めてだから時間かかっちゃって。」

「それはまさか最強のアーマードスーツ“アカカゲ”！私がパパに何度頼んでもくれなかったのよ！何であんたなんかが！」

ミスズは剣を交えたまま、怒って言いました。

「博士は僕に、お嬢ちゃんを止めてくれと言って、“アカカゲ”を装備してくださったんだよ。さあ、もう君に勝ち目はない。こんなことは終わりにするんだ。」

ミスズは黙っていました。

「さあそのアームカリバーを解除して。」

やはり黙っています。

「お嬢ちゃん！」

「みんな...。」

「えっ、なに？」

ミスズが聞き取れないくらいの小さな声で何か言ったので、怪貝さんは聞き返しました。

「みんな...みんなアタシをバカにしてっ！」

「うわっ！」

ミスズは怪貝さんをはね飛ばすと後ろへ跳びました。

「お嬢ちゃんお嬢ちゃんてうるさいわね！もう二十歳過ぎてんのよ。子供扱いしないで！」

「いやあ、そういうつもりじゃ...」

「パパだってそうよ。“アカカゲ”は私にはまだ早いつて触らせてもくれなかったのよ！」

ミスズはちょっと涙目になっています。

「でも、まーくんは違った。まーくんだけは私を大人の女として接してくれたの。」

「都合のいい女だったんだ。」

伊達がまたミスズを刺激するようなことを言いました。

「ちがーう！」

ミスズは何やら黄色いカードを取り出しました。

「あっ、まずい！あんなものまで持ち出していたのか！お嬢ちゃん、じゃなくてミスズさん止めるんだ！」

怪貝さんは明らかに焦っていました。

「怪貝様、どうなされたのです？あのカードはいったい。」

伊達が驚いて訊きました。

「あのカードは...あっ、ああああ！」

怪貝さんが答える前に、ミスズはそのカードを剣状に変化した右腕のスリットに差し込みました。

《イエローカード》

無機質な電子音声が響いたと思うと、ミスズの体が黄色く光りました。

光の中でミスズの体が徐々に変形していくのが見えます。体が大きくなり、尻尾のようなものま

で見えます。

伊達も怪貝さんも気圧されて、声も出せません。。

光の中の影はますます大きくなり、恐竜のようにも見えます。こちらを見たミスズの目が赤く光りました。

そのときです。バチンッと大きな音を立てて、突然光が弾け飛びました。と同時に重圧も一気に消えました。

「どうしたんだ？」

重圧で気絶してしまった皇女を気遣いながら、伊達がミスズのいた辺りに目をやりました。

そこにはミスズが裸で横たわっていました。右腕も元に戻っています。

「お嬢ちゃん、おっと、ミスズさんにはまだ使いこなせなかったみたいだね。」

怪貝さんはミスズに歩み寄り、横に落ちていたイエローカードを拾い上げました。

「このカードは、自身の限界を越えてパワーアップする恐ろしいアイテムなんだ。だけど、その急激な変化に耐えられる強い心身が必要だね。まだ無理だったようだね。」

「彼女は？」

伊達は、ピクリとも動かないミスズが少し心配になりました。

「気絶しただけだから大丈夫。」

怪貝さんはミスズを抱き上げると、お父上のところに一旦帰してあげてもいいか伊達に訊ねました。

「その体ではしばらく動けないだろう。お城も混乱しているし、いいでしょう。後日、重要参考人として出頭してもらいます。」

怪貝さんはニッコリ笑って、飛び立ちました。

顔だけ変身を解除した怪貝さんは、ちょっと異様でした…。

ミスズを失った蟻軍団の統率は乱れ、それからはアレキサンドロス金剛率いる警備部の敵ではありません。全員捕えられてしまいました。

喜びに湧く警備部員達を前に、元警備部長は空を仰ぎ苦笑していました。

「ほんとにゆる～い曲だな～。大丈夫かあ。」

『王の間』からは、お城を修復するための曲が流れ続けているのでした。

♪王様になりたい～

王様になったらどうしよう

近所のおじさんが 風にとばされた

となりのおばさんが 植木に追いかけてまわされた

向こうの通りの友達 は 自転車とられて大さわぎ

王様になりたい

王様になったらどうしよう

外の兄さんが 城にしのびこみ

中の姉さんは 恋が実って城を出た

お城は砂糖で出来ている

水かけられて大きわぎ

王様になりたい

王様になったらどうしよう～♪

王様になりたい

王様になったらどうしよう～♪

王様になりたい

王様になったらどうしよう～♪

「許さん！許さんぞ！それだけは許さん！」

お城中に王様の声が響きました。

「なにが『それだけは』よ！お父様はいつもそうじゃない！伊達さんは私の命の恩人なのよ！」  
皇女もその上をいく大声で返しました。

事件以来、伊達にメロメロになってしまった皇女が、ふたりの正式な交際を王様に認めさせようとしているのです。

「確かに、この度の伊達の働きはアツパレなものであったが、それとこれとは話が別だ。お前の交際相手となると身分が…」

「だから何で身分とか関係あるのよ！」

「“皇女”だぞ！わかってるか？自分の立場が。関係あるに決まってるだろ、ボケ！」

「まあ、一国の王様がなんて了見の狭い！」

王妃は、またいつもの親子喧嘩が始まったと思ってにこやかに見守っていました。

「私は皇女が選んだ人なら大丈夫だと思うけどな〜。」

と小さな声で呟きました。

「ん？王妃、何か言ったか？」

「いえ、なにも。ホホホホホ。」

「伊達、本当に出ていくのか？」

こちらは警備部室。アレキサンドロス金剛は、部長に返り咲いていました。今回の蟻の首領逮捕に関しては、すべて彼が指揮を取ったと伊達が王様に進言してくれたおかげでした。

「はい。私の役目は終わりました。もともと、皇女様をお護りしたくて警備部へ入りましたから。」

「これからもお護りすればよろしいじゃないですか。ここで。」

伊達を慕う部員も多かったのですが、警備部長は、引き留めても聞く奴ではないと心の中で思っていました。

「もう決めたことだ。」

伊達はキッパリと言いました。

皇女には黙っていて欲しいと言って、伊達は少ない荷物を持って警備部室を出ていきました。

「部長！いいんですか？」

「あいつのことだ、自分が居れば皇女様に迷惑がかかると思ったんだろう。」

警備部長は少しの間、伊達の出たドアを眺めていましたが、「さて」と立ち上がりました。

「どちらへ？」

「お城周辺を巡回して、今日は直帰する。」

コートを着ると、ゆっくりした足取りで部屋を出ていきました。

「部長の様子おかしくなかったか？何だか難しい顔して。」

「ああ、あれはスナック真由美に行くときの顔だよ。今日はママが警備部長再就任のパーティーを開いてくれるんだと。朝からニヤニヤしっぱなしだよ。伊達さん戻ってきてくんないかな〜。」

「こーじ！お前何度言ったらわかんだよ！発泡スチロールは燃えないゴミだよ！」

「だっておじさん、これ燃えるよ。ほら。」

阿部こーじがスチロール容器に火を点けると溶け出しました。

「ばか！ダイオキシンが出るだろ、早く消せ！」

「ダイオキシンて何ですか？」

「お前、頭はコンピューターなんだからもう少し賢くてもよさそうなもんだがな。」

「へへへ。」

晴れて免罪が解けた元門番の阿部こーじは、お掃除隊に仮入隊。おじいさんに鍛えられる毎日でした。

「あっ！ピンはリサイクルだと言っただろ！まったく...。」

老人は渋い顔をして、3ダース分の空き瓶を持ってきました。こーじに持たせると、「お前には体で覚えさせてやる。」とお城の外へ連れ出しました。

「そのまま城壁に沿って10周ランニングだ。」

「そんな〜、無茶っすよ〜！」

「正門をぶっ壊したほどのお前さんだ、チョロいもんだろ。さっさと行ってこい！」

「おとなしく門番やってればよかった。あ、はいはい、行きますよ！」

尻を蹴り上げられ、こーじは走り出したのでした。

ちょうど正門で門番と話をしていた伊達が、ふたりの様子を微笑ましく見ていました。

「それじゃ、行くね。お城を頼むよ。」

「はっ！伊達参謀長官もお元気で。」

「もう長官じゃないですよ。門番さん。」

敬礼する門番に対して笑いながら手を振り、伊達はお城を後にしました。

「あ〜、行かれちゃった。次は20分後かあ。」

とりあえず実家に帰ることにした伊達は、バスを待っていました。

しばらくするとバス停に一台のワンボックスカーが停まりました。

開いたドアの中を見て伊達は驚きました。

「どうして...？」

中の人物から何事が告げられると、さらに驚いた表情になりました。そして腕を掴まれると、半ば強引に車の中に引き入れられてしまったのです。

ドアが閉まると、車はゆっくりと動きだし、どこか遠くの町へ去っていきました。

その日の夜のこと。

「皇女がないだと！」

夕食に出てこない皇女を呼びに行かせた王様は、侍女長からの報告を聞いて飛び上がりました。

「はい、手分けしてお城中を探しましたがどこにも...」

「あと、実は...。」

側近のひとりが王様に何やら耳打ちしました。

「なんだと！ワシの銀座クラブ巡り用のワンボックスカーもないだと！」

「えっ？王様、銀座クラブって何のことですか？」

王様の言葉にいち早く反応したのは王妃でした。

「ななな何だって、ぎぎ銀座なんて言ってないぞ。いやだな～、王妃ったら～。」

王様は内心「しまった」と思いながら、なんとか否定しました。

「忍びで市中を視察するときの車のことだよ。“GINGER CLUB”という車でな。」

「まあ、あんなに私の“お買い物”を批判されていましてのに、実はコッソリ市中視察をされていたなんて。さすが王様、わざわざ公言されないところがステキですわ～。」

王妃はまたもや王様にウツトリです。

「王族が無防備に外を歩くとどんな危険があるかもしれないからな。王妃にそんな危険なことはさせられない。それにやはり王が自ら見て回らないと正確な情報は入らないからな。ワッハッハッハッハッ！」

王様は渡りに船と、調子のいいことを言って切り抜けました。

「あの～、それで皇女様は...」

侍女長はヤキモキして、話題を修整しました。

「トイレにでも行っているのではないのか？」

「いえ、一番最初に探しました。」

「シャワー室は？」

王妃も心配した顔で訊いています。

「シャワー室も確認致しましたが、いらっしやいませんでした。」

「庭はどうだ？」

侍女長は首を振りしました。

「植木達に探させましたが...。」

そこにひとりの侍女が走ってきました。

「侍女長様にご報告です。お耳を。」

侍女長の顔色がさらに青ざめました。

「どうしたのです？」

王妃が不安を感じて尋ねました。

「申し上げます。元F1レーサーの皇女様付き侍女が行方不明です。」

「なんと...。」

一同言葉を失い、一斉に王様の方を見ました。決断を求める視線が、王様に突き刺さります。

実は今日の夕食は、月に一度のフレンチの日。いつも和食しか出してもらえない王様が楽しみにしている日でした。

王様は目の前に出されたオードブルと侍女長、そして王妃の顔をチラチラと見ていましたが、意を決して言いました。

「夕食は中断だ！みんなで皇女を探せ〜！」

電気醬説『K I N G～キング～』

<http://p.booklog.jp/book/57549>

著者：りいだぁ (by電気醬油)

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/makoto912/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/57549>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/57549>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ